

# 幼児の教育

第六十二卷

第八号

幼児を交通事故から守りましょう



8

日本幼稚園協会



# 幼児のための 紙芝居です



●'63年度幼児テキスト紙芝居全集第5回配本中

## みっちーヨットにのって

¥ 350 夏のあそび  
画・加東てい象

## さかなの村に花火があがる

¥ 350 川の中のいきもの  
画・斎藤年弘

## 動く保育室・ディスプレイカード よいこの一日

監修・お茶の水女子大学教授 平井信義  
医学博士  
¥1000 A全版 上質紙12枚

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17〔振替東京〕株式会社 教育重劇  
TEL (341)3400・3227・1458 29855

### 新刊 フレールベル館の音楽書

幼稚園教育要領に準拠した幼児のための楽しい曲集

## みんなで たのしく 〈曲集〉

日本幼児教育研究会編 鑑賞教材・歌唱教材・リズム教材など  
全24曲を収載、系統的曲集 250円

幼稚園教育要領に準拠したレコードによる音楽リズム指導の実際

## みんなで たのしく 〈指導書〉

日本幼児教育研究会編 同名のキング保育レコードより25曲  
を抜粋、多角な解説を試みた 250円

幼児のための

## 7つの オペレッタ

藤田妙子著 日常のリズム遊びから自然にオペレッタへ発展できる楽しい曲集 340円



幼児の教育 目次

——第六十二卷 八月号——

表紙 初山 滋

児童福祉白書について……………山下俊郎(2)

ボール紙のコマをまわす小さい指先……………清水 エミ子(6)

自然領域についての研究の手引

私の園の試み……………浅羽睦子(22)

事例研究の手引

「無口な子」の指導事例……………金子徳恵(27)

倉橋賞を受賞して……………井上範子(33)

児童発達講座 ⑤

乳児期における社会性の発達(その二)……………丹羽淑子(34)

倉橋賞を受賞して……………井桁佐以子(53)

四十年の歩み……………結城光雄・西元茂子(54)

\* 洋書紹介——教師のための幼児教育の手引……………(58)

# 児童福祉白書について



山下 俊郎

今年には児童福祉法が施行されて十五周年にあたっている。このことを記念して、こどもの日に、厚生省から児童福祉白書が発表された。

児童福祉法が施行されるようになった後、昭和二十六年のこどもの日には児童憲章が制定発布され、また一九五九年すなわち昭和三十四年の十一月十七日には国際連合の児童の権利宣言が全世界にむかって発表され、わが国でもその一月のち、参議院でこれに賛成しその実行に進むという決議がなされたのを最初として、各方面からこれを取入れる体制が宣言されるようになった。

児童福祉法、児童憲章、国連児童権利宣言という三本の大きなしっかりした柱ができて、わが国の児童福祉もいちじる

しい発展をとげては来た。これらの柱のなかった頃にくらべると誠に大きな進歩が見られるのである。しかし、その一面、まだまだ残された大きな問題には大きいかつ重要なものがある。わが国の児童福祉は、いま一つの大きな転機に來ているとわいていい。そこで、この児童福祉白書の発表になったのである。

児童福祉白書の発表にともなうて、二つの大きな事があった。その一つはすでに白書の中にも述べてある全国児童福祉会議が五月の三十、三十一の両日東京で開かれたことである。この会議において全国から参集した児童福祉関係者は、六つの分科会にわかれて協議し、大きな成果を挙げた。もう一つは、昨年発足した池田首相の諮問機関である「人づ



くり懇談会」が人づくりの根拠としての児童の問題をとりあげ、この白書を取りあげたことであり、五月二十七日の同懇談会には児童の問題についての発言者として、木下正一医博とわたくしが新たに参加して発言させてもらったことである。首相はこのうち全国児童福祉会議にもわざわざ臨席して、おそらく秘書官が書いたであろう祝辞の原稿をはなれて自分のことばで所感を述べる部分もあるという型破りの挨拶をしたほどであるから、児童問題に対する首相の関心はかなり強いものがあると見ていいであろう。

このような意味で、児童福祉白書は、かなり大きい影響をもたらしつつあり、その影響をわたくし達の子どもの幸せの上から願うものでもたらずものにしたいと、わたくし達は心から願うものである。そして、そのように願うが故に、わたくしはこの白書の内容について世の中のおとなが知ってほしいと思ひ、わけても幼児保育のことにたずさわっておられる方々によく知ってほしいと願うのである。そこで、きわめて大まかな事だけしか述べられないと思うが、白書の内容について紹介してみたいと思う。

\* \* \*

まずこの白書の目ざすところは何かということであるが、

これはいうまでもなくわが国の児童問題の現実をはっきりとつかみ、その問題点をはっきりさせて、将来の見通しをたてる資料を提供するということである。

そこで、ごく大まかに目次を拾うという形で内容を述べてゆこう。まず序は児童福祉問題の展望という題で、白書の目標から述べ、諸外国の児童福祉の実状を紹介し、新しい方向への展望をしている。

Iは児童福祉に関する問題点とその背景という題で、第一節では母子保健上の問題点として、妊産婦、乳幼児の保健、体位、栄養、家族計画、人工妊娠中絶の実態と問題点を明らかにしている。第二節では、心身機能の障害について、精神薄弱児、盲ろうあ児、言語障害児について述べる。第三節では家庭養育における障害について、父母の有無、経済的貧困、母親の就労についてふれる。第四節は、健全育成上の障害について、非行、不慮の事故、自殺、長期欠席、家出などのいわゆる現象面に現われた問題、次に、児童をとりまく社会環境とその問題点、さらに家庭生活における問題点ということで現代の親子関係の問題点にふれている。第五節は、児童福祉施設その他運営上の問題点として、施設に関連する現行制度の問題点をえぐっている。そして、第六節において、児童

福祉問題の背景という見出しで、人口変動と家族変動の問題について述べている。

Ⅱは児童福祉の保障と実施機関という章で、地方公共団体の役割、児童相談所、福祉事務所、保健所、児童福祉審議会、児童委員、児童福祉行政等の予算の各項目について、現行の児童福祉の実状を解説している。

Ⅲは一般児童対策という章である。ここでは第一節が家庭対策でそこでは家族計画、家庭養育の指導について述べ、第二節では母子保健について妊娠中の諸事項、未熟児対策、新生児訪問指導、三才児健康診査、母子保健施設のことが述べられている。第三節は、健全育成について、児童厚生施設、地域組織活動、児童福祉のためのボランティア活動、児童福祉審議会の推せん、勧告、こどもの日行事に関して述べてある。

Ⅳは、要保護児童対策の章である。第一節は要保護児童対策の概要で、児童福祉施設入所を伴う施策とこれを伴わない施策とにわけて解説してある。第二節は、身体障害児、第三節は虚弱児、第四節は要保護乳児、第五節は結核児童の療育、第六節は重症心身障害児の療育、第七節は精神薄弱児、第八節は要養護児、第九節保育に欠ける児童、第十節要教護児のそれぞれ保護、指導の問題について述べている。

Vは、母子福祉対策の章である。第一節は経済自立への援助について、第二節所得保障および生活援護、第三節就労、第四節住宅、第五節母子福祉施設、その他について述べている。

Ⅵは、児童福祉に関する調査研究と専門家の養成という章である。ここでは、現在の状況として、厚生科学研究と統計調査、医療研究、児童問題研究所、専門家の養成、現任訓練の諸問題にふれてある。

Ⅶは、児童と社会保障という章で、児童扶養手当、その他の諸制度における保障、児童手当の問題が扱われている。

Ⅷは、児童福祉に関する内外情報その他関係事項という章で、国内と国際の両関係の事柄が述べられている。

Ⅸは、白書の結びの章で、児童福祉行政の方向として、中央児童福祉審議会による方向づけと、全国児童福祉会議に期待するもの、という二節で結んである。

そして最後に、児童憲章、児童権利宣言、児童福祉施設の現状、児童福祉対策一覧および昭和三十七、三十八両年度の予算比較表などが、資料として挙げられている。

\* \* \*

以上、児童福祉白書を、その目次を書きならべる程度にしか紹介できないのは誠に残念であるが、おおよそどういう内

容が盛られているかということ、わかっていただけのこと  
と思う。そこでこの内容を一つの足場として、児童福祉とい  
うことの基本的な考え方について少し述べてみたいと思う。

いわゆる児童問題において、まず最初の出発点は、古い用  
語としての児童保護ということばに現われている通りに、保  
護というところにある。それは、心身の欠陥や環境に恵まれ  
ないという条件から発生するいわゆる要保護児童の保護とい  
うことである。これは諸外国の場合でも、わが国の場合でも  
おなじであって、わたくしはこのことを何らかの意味にお  
いてマイナスの状態にある子どもの保護ということだと説明  
している。そしてこのようなマイナスの状態にある子どもの  
保護ということから、さらに積極的に進んで行くと、子ども  
達がマイナスの状態にならないように対策をたてるという方  
向が打ちたてられる。これは消極的なあと始末よりも、積極  
的な予防へ進むということである。そして、これをさらに進  
めるならば、単にマイナスの状態にある子どものことだけを  
考えるよりも、社会の子ども全体のことを考え、この子ども  
たちの生活を高め、幸せを進めることによって、マイナスの  
状態の子どもも高められるという全体的、積極的な立場が出  
てくるのである。このような見地に立つとき、消極的な児童

保護ということから一步進んで、積極的に全体の児童の幸せ  
を確保し、これを高めるといふ児童福祉という考え方が出て  
くるのである。

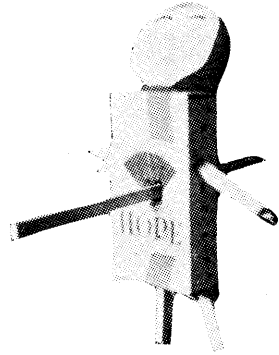
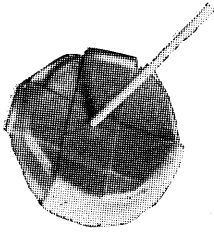
今日の児童問題は、消極的な保護でなくて積極的な児童福  
祉の推進によってすすめられる。わが国の児童行政も、いま  
まさにこの方向に新らしく脱皮しつつあるところである。こ  
の脱皮は、もともと児童福祉法の制定の時から行なわらるべき  
であったのであるが、当初からつい最近まで、消極的保護の  
色彩はおおうべくもなかった。これがようやく脱皮の方向を  
とりつつあることは誠にうれしいことである。

とくに、心理学や医学の科学的研究の成果をとり入れて、  
乳幼児期の重要性を認めてその対策に重点を置き、また母性  
を重視し、さらに乳幼児、児童の生活の本拠としての家庭を  
重視して家庭対策を深く考慮していることは、誠に大きな進  
歩である。そして、このような動きの中にあつて、幼児保育  
の営みはきわめて重要な意味を持つことはきわめて明らかで  
あり、諸外国の保育施設でもそうであるように、保育施設を  
足場として家庭および母親の指導にまで進むことは、児童福  
祉の上に大きな貢献をするものであることを、改めて認識し  
たいと思うものである。



# ボール紙のコマをまわす

## 小さい指先



清水エミ子

しゃぼん玉あそびとじしゃくあそびとの経験（六二巻二・五号）で、私は、くり返しによるあそびの発展と子どもたちのたくましい生活力と力つよいエネルギーを感じさせられた。そして、くりかえしあそべる活動の効果（失敗を成功させようとするがんばりの態度）をはっきりと知らされたのである。

どんなに注意力のたりない子どもでも、室のすみまにぶらさげてあるじしゃくに近づくと、かならずといってよいほど、じしゃくに釘または鉄の棒がついているかを確かめ、そして、さびをきにしてみがいたりしているのである。このすがたは充分にあそんだあとの近親感とその時の経験が、またあそぼう、そのためには磁力がなくなつてはあそべなくなる、という注意力を育ててくれたのではないかと思う。

しかし、ここまでで安心してはいけな、これから先の子どもたちの可能性を確かめなくてはと考え、今までは誰もが抵抗なくくり返せる教材であったのであるが、次の段階として、いくらか抵抗のある教材を考えて頑張りの態度に抵抗力をつけなくてはと意気込んだ。いざとなるとせっかくの今までの結果をこの小さい抵抗でこわしてしまつてはと、何回もしりごみし、弱気にもなつた。しかし、子どもたちの力つよいエネルギーを信じ、子どもたちに投げかけてみることにしたのである。

今までいっしょにシャボン玉、じしゃくあそびをこころみてきた他の幼稚園の友だちと、

①どの位の抵抗ならくり返しが可能だろうか。

②ひとりの落こ者もださずに子どもたちが楽しんで活動できる教材はどんなものが適当だろうかを考え合い・失敗の程度が予測でき・その失敗が何らかの方法ですくいあげられ、劣等感にならず、がんばりの態度が身につけられるもの・そして活動の発展が期待できる教材をと考えてみた。

いろいろの意見がでたが、自分の力で作り、あそべるもの、そして三学期であるということと、「先生、ぼくの指はとってもいい指だよ」（そうよかったね）というところ、「そう、ぼくがよくまわらせて」というとプラスチックのコマよくまわるんだもの」など、子どもたちの声もこの期にあったので、コマあそびを取りあげてみることにしてみた。

このあそびは今まで、男はコマ、女ははねつき、と区別して扱われがちであったあそびのようである。そのため、男児のみわすコマをじっとみながら、「あたしもやらして」とそっと頼んでいる女の子、みんなが園庭にいる時、ひとりそっと室に入りだれもないところでそっとコマをまわしている女児をみかけることが時々ある。こんな小さい時から男のあそび、女のあそびと区別なくどんなことでも経験しあえるようにするためにと、みんなはり切ってとりあげてみた。

#### △方法Ⅴ

◎自由あそびの時でなく、いっせいに全員で活動する。

#### ●材料

うすでの白ボール紙（画用紙半分）大を一枚ずつと、割ばし、ひご竹、マッチ棒、穴あけ用釘をこちらで用意して、子どもたちに示し、その他は何でも、どのように使ってもよいという自由さを与えて、その活動を観察した。（セロテープ、ビニールテープ、今まで使ったことのある廃品、クレヨン、えの具、マジックなどはふだんのままにしてあたえた。）

そして、その活動を他の園や学級と比較してみた。

#### 文京区

◎製作 五才 一年保育

・最初は牛乳のふた程度のものにマッチ棒を使ったものが多かった。型は丸が大半。

・模様は次頁(④)の通りでこれを色別にぬる。

・ホッチキスで二枚重ねる。(④)

・わりばしの芯をセロテープでとめる。(④)

・三枚を糊ではりつける。

・四角のこまをつくる。(④)

・四角いコマにわごむをかける。(④)

・「ほしごま」四角いコマに三角の羽を四枚糊ではりつける。(④)

#### ◎あそび方

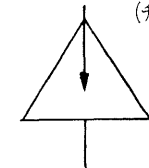
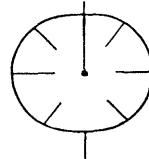
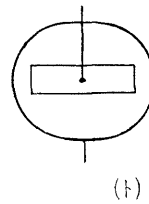
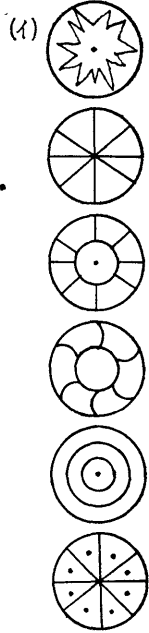
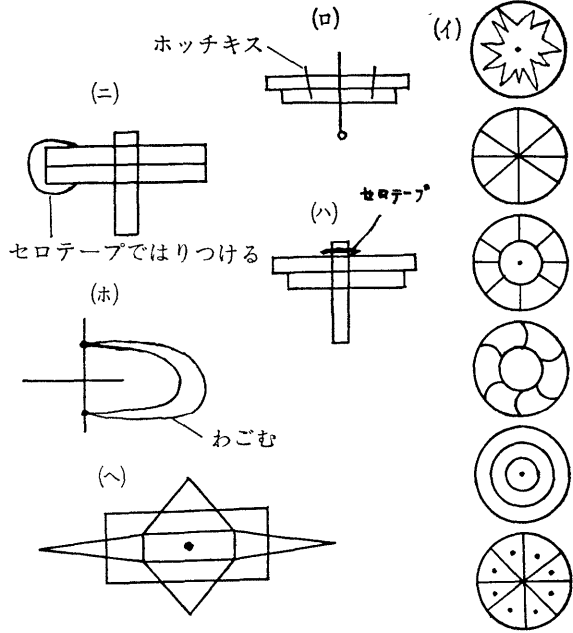
大半が平凡に机の上でまわしていた。四角コマを考えた子は上からまわしながらとばしていたが目立った。

△江戸川区▽

5才 一年保育

◎製作

- ・文京区と同じ丸型がまず大半、模様もやや同じ。
  - ・わごむをかけたコマも同じように現れた。
- 文京区とちがうものに



・丸の上に長四角を重ねる（はりつけずに）丸のまわりに切り込みを入れる。(ト)

- ・三角ゴマ
  - ・菱形ゴマ
- などがみられた。

◎あそび方

- ・芯棒の穴が大きくなった時わごむをかけた。
- ・芯棒のさす位置 まん中じゃなくちゃだめ。
- ・芯棒の長さ
- ・短い方がいいよ。
- ・さきつちよとんがってる方がまわるよ。
- ・大きい方より、細い方がいい。(わりばしよりひごのほうがよい)

・コマの大きさと型

大きい丸だとふらふらするよ、小さいとよくまわる、まんまるだとよくまわる。

わごむをかけるとだめだよ、重くなるからかしら、などの発見をしながら作りなおしたり、はりなおしたりしてあそんだ。



・文京区と同じもの

④上からまわしながらとぼす。このとぼし方がよろこばれ、どの位高くてもまわるか友だちと競争がはじまった。

◎どっちが長くまわるか。

平凡に競争しながらまわし方をかえていた。

△千代田区▽四才児

### ◎製作

年令的な差がはっきり表れた。

・紙いっぱい一つのコマを作ってしまう子が多かった。型はだ円型が多かった。(丸にしたくてもできない)

・紙の四すみを上に折りあげただけ、棒は割ばしを使った子が多い。  
い。

・女兒は全員がとまどい、紙の上にコマの絵をかいて切りぬいてしまったが、男児のをみてはじめてまねて作り出した。

### ◎あそび方

・大きいコマに短かい棒でまわしたがまわらず、長い棒に変えたがたがたするので切って小さくしていく。だんだん小さくしていくうちにまわすことも発見でき、よくまわるようになった。

・この発見から、こんどは直径2cm位の小さいのを作ってみよう。ひごだけ、くぎをさし込んでまわしていた。

・釘は重くてまわせなかった。

・紙の上でまわすと(机の上が木目でてこぼこ)よくまわって大よ

ろこび。

・女兒の作ったのは芯棒の位置がめっちゃめっちゃでまわらないので、男児のを借りてまわしっこしていた。

・女兒はあまり興味を示さなかったが中にはいっしょうけんめい作りなおしていた子もあった。

△足立区▽一年保育 四月〜八月生まれ、大きい組

### ◎製作

丸とだ円型は他区と同じようだった。その他に、他の区とちがったものは

・三角を二つ合わせて、芯棒をさしたもの(㉑)

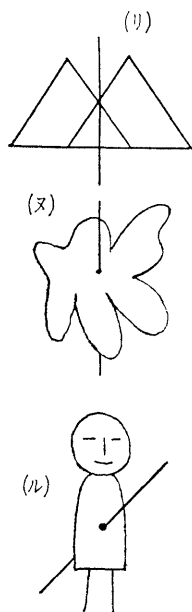
・多角型コマ(切りくず利用のコマ)

・花コマ(ひまわりのような型のコマ)(㉒)

・人形コマ

人間の型を切りぬいておなかに芯棒をとおす。(手はなかった)まわらない。後で教師の示唆で手がつく。手をつけるとまわった。

(これも子どもの発見させたかった)



・立体的コマ

木製のコマのように切り込みを入れて、立体的に組立て、セロテープではりつけて芯棒にわりばしを入れたが、まわらずに倒れてしまった。

### ◎あそび方

・ひとつのコマができると机の上や床でまわしてみても、大きさと芯棒の太き長さを考えていた。まずマッチ棒をさし、竹ひごをさし、わりばしをさしていった。

・だんだん穴が大きくなりすぎるとセロテープで芯棒をとめてまわしていた。

・さかさにまわす。

「さかだちごまだよ」が流行した。

・立体のコマがまわらないのをくやしがり、次の日の朝空箱に芯棒をさしたコマを考えてまわしてくらべていた。

(イ)どっちが長くまわるか。

(ロ)どっちがいきおいよくまわるか。

(ハ)コマのようがまわるとどっちがきれいかなど、くらべあっていた。

(ニ)さかだちまわし。その後一週間位こまあそびはつづいたと報告があった。

△足立区V 七月〜十月

### ◎製作

・四角、菱形がまず現れた、が。

・丸くて小さいのがいいぞと数多く作り出した。(いっばいつくれて)

・丸をかさねる。(4cm位の同じ大きさを5枚重ねる)

・色別に柄をつける。

・直径4cmの丸にわりばしをさす。

・わりばしの先をとがらせる。

・芯棒のかわりに小指をつっこんで、まわそうとしていた子がめだつた。

この子は次にわりばしを三本入れてまわすがまわらず、また人差指を入れてまわしていたがまわらないので、わりばしをセロテープでとめていたがまわらないので、やっとあきらめのこりのボール紙で作りなおし「やっとできた」とよろこんでいた。

この子が、いつなげ出してしまいか、私の級はちがうが見にいつきがきでなかった。心の中でがんばれ、がんばれ、自分でまわるこまを作ってくれるようにと応援したのだ。

①まわしっこをする。(どっちがながくまわるか)

②ひとりでもわしてあそぶ。

③ひとりでも何個もつくって次々にまわして色の変化とまわり方を比較して楽しんでいる。

④芯棒の長さをいろいろに変化させてまわす。

次の日の朝から、

④ さかさまわし

⑤ なげまわし

① 手の上まわし をやっていたが他の材料はあまり使わず、変化のある型もあまり現れなかった。

△ 足立区▽ 十二月～三月生れの組（私の学級）

◎ 製作

・ 型・丸・四角・三角は他の学級と同じようなけいこうでまず現れた。

・ 模様 文京区と同じもの他に(カ)のようなものがあり、色のピニールテープをいろいろにはって変化をたのしんでいた。また形は、

・ 多角形 多角形のでっぱりを上折りあげる。(ウ)

・ だるま(カ)

・ さかな(ウ)

・ 四月～八月生まれの組と同じもの。

三角を二つ合わせたもの。(ウ)ぜんじのが現れたのでびっくりした。

・ 長方形を三枚いっしょに重ねて芯棒をとおす。

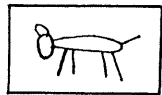
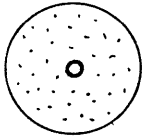
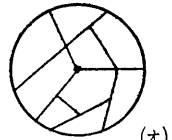
・ 丸を上三枚重ねる。(大・中・小)

・ 切れはし多角形を二枚重ねてまわす。(ツ)

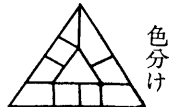
・ 羽つきゴマ

四方に切り込みを入れ、そこに小さい三角をはめてまわす。(ネ)

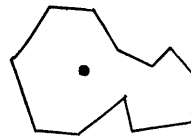
◎ あそび方



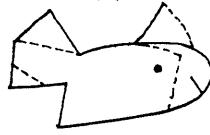
動物の絵をかく



色分け



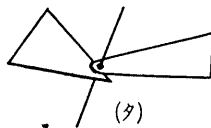
(ウ)



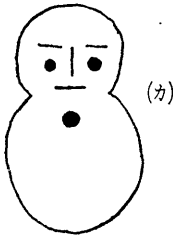
(エ)



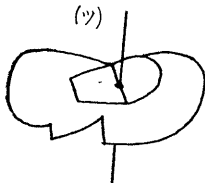
(オ)



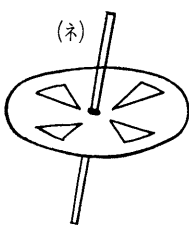
(カ)



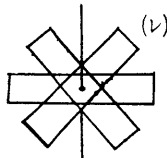
(カ)



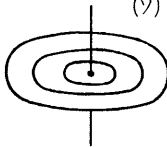
(ツ)



(ネ)



(レ)



(ソ)



・はじめ直径五㎝位の大きさの丸に竹ひごをさしてまわしていたが、うまくまわらず芯棒だけまわってしまう。穴が大きくなって。

・わりばしをさしてまわす。

・穴が大きくなって芯棒がぬけるとセロテープで押えていた。

・三角ゴマをまわして丸くみえるのを不思議がり、丸から三角形に作りなおした子が多く目立った。

・紙一枚じゃ軽すぎるんじゃないのと言って上にだんだん小さいのを重ね、わりばしをおしてまわしていた。

この時、芯棒の長さとコマの位置のちがいでまわり方の違いがあることを発見し、いろいろの長さの芯棒を入れかえ、コマをとめる位置をクレヨンでいろいろまわしてためしていた。

・切れはしを二枚重ねてまわしたら思いがけずよくまわったので手でちぎって芯棒をおしてまわしていた子もあった。

イ、ひとりで、まわしてあそぶ。

ロ、まわしっこをする。(どっちがながくまわるか)

ハ、もようや型の変化を楽しむ。(カラーテープをはって)

ニ、芯棒をマッチ、ひご、わりばしを穴の大きくなるにつれて取りかえてまわす。

・芯棒の長さを変化つけてまわす。

・コマの位置をいろいろに(あげたりさげたり)してまわす。

・さかさまわし なげまわし(空中まわし)

・さかをまわしてすべらす(積木で坂をつくって)

以上簡単に同じ教材での作り方とあそびの方法を比較してみたが、これでもはっきりわかるように、

・4才児にはややむりな教材であったようである。(しかし導入やこれまでの経験でもっと発展させられたとも考えられる。)

・1年保育年長は作り方もあそび方もだいたい同じ方向に発展していった。

・子どもたちにコマはまるいものという概念がはっきりとしみ込んでいることがわかり、他の型のコマをめずらしそうに眺めている子がどこの学級でもみられた。

・作り方の発展のさせ方もあまり地域差はみられなかったようだ。丸から出発して三角、四角、多角形、上に重ねたり、二つを合わせたりというぐらいいであった。

・中で特に目立ったものは、

文京区の星ゴマ、江戸川区の切り込みゴマ、足立区の三角ゴマ、人形ゴマ、立体ゴマ、さかさゴマ、羽つきゴマなどくらいだった。

しかし、あそびながらの子どもの発見にはかなりの差がみられた。

#### ◎発見発展の差

・千代田区の4才児はせいに活動しただけで、その後も取り出してあそぶことはなかった。

・江戸川区、文京区はやや同じぐらいの持続時間だったようだ。ただ作った日に各自家庭に持ち帰ってしまったので、次の日からの発

展をみる事ができなかつた。が江戸川区などは自由あそびに数人がコマ作りをしていたと報告があつた。

・足立区は作ったものを各自の戸棚に自由にしまつておいた組と持ち帰した組とがあつたが、それから二週間位コマあそびがつづけられた。

九月十一月生まれの組では、このコマあそびが刺激になり、女兒が木製コマをさかんにまわしてあそぶようになり、男児も一時下火になつた木製コマまわし競争がさかんになつたという報告を受けた。(クリスマスのおくりものに男児がもつた)

・足立区ではこの学級でも家に帰つてからもキャラメル空箱をひろげてコマ作りをしたり、空箱そのままのものに芯棒をさして作ったコマなどあそび、次の日登園の際持つて来て友だちにみせあつたりしていたのが目立つた。

以上は私の所に集つたデータのあらましを比較しながら述べたのであるが、もう少し、私の学級の具体的な活動をみながら、頑張り状態と感情の表れを述べてみよう。

### I いっせいに活動した時

◎ どうしていくらやつてもまわらないのかなあ

あまり製作のとくいでないS男

与えられたボール紙を二つ折りにし、その一方に直径10cm位の丸を描き、ていねいにならず巻き模様を描いて竹ひごを芯棒にさし込む。コマの大きさにくらべて細くて短い竹ひごの芯棒なのでいくら

力を入れてまわしても、いきおいつけてまわしても、紙の重みでまわらない。五、六回やりなおしたS男は私の所にやつて来て、「まわらないよ、いくらやつても」と半べそをかいている。私は、また根気のないS男がはじまつた、やっぱりこの教材では頑張り力をねらうのはむりなのだろうかど不安を感じながら、S男のコマを手にしてS男の座席にいき、まわりを見まわすと、他の子どもたちは直径5cm位の丸や三角などをせつせと作り、与えられたボール紙の余白でいろいろの形やもようのものを作り、芯棒もマッチを入れたもの、ひご竹、わりばしと作つてみてまわしながらくらべていたので、私はその子に、

「S男ちゃん、こんな大きな立派なの作つたけどまわらないんですって、どうしてかみて教えてあげてよ」と話してその場をはなれた。

・友だちが作つてあげてしまつては何もならない。

・他の友だちも原因の発見ができず「やっぱりだめだ」となげ出し、しまつたらこまると心配して。

・いつでもとんで行つて助けてあげられる位置で見守つていた。

◎ 大きいコマより小さいコマのがよくまわるよ

大・中・小と三つの丸コマを作つてまわしくらべていたH子がS男のコマに手を伸ばし、「あたしのコマいちばんちびがいつとよくまわるよ、みてごらん」と三つを大きい順にまわしてみせた。じつとみていたS男は無言で芯棒をぬき取り、直径6cm位に小さくしてまわしていた。まわし方は上手にはいえないがいくらかまわつ

ていた。少しして、「先生、大きいより小さい方がいいんだよ、H子ちゃんがそう言ったよ」とコマをまわしてみせてくれた。

・私は子どもの力を信じてよかった、と胸をなでおろした。その時である。

・「どうしてY枝ちゃんのはH子ちゃんより大きくてもよくまわるのかねえ」

と言うのが聞えてきた。Y枝は仕事はのろいがきちようめんできちんとした仕事をする子なのだ。「Y枝ちゃんは力入れてまわすからじゃないの」とか「色のぬり方がきれいだからかな」「Y枝ちゃんの棒、きつくくっついてるからだ」とやや正しい意見をしはじめた。

「ほんとだ、穴が大きくなるとまわらないんだね、そんならセロテープで動かないようにはれば」と言われて、数人セロテープで芯棒をとめたがY枝にはいくらやってもかなわない。みんなY枝のまわりをとりまいて考えこんでしまった。「先生どうしてなの」と助けを求める子も現れたが「どうしてかな、先生も今考えてるの」と言う。「だれが早く考えるか、競争だ」とおっちょこちょいははしやいだりしていた。そのうちいつも他の子とちがう発見をするT男が「Y枝ちゃんの切り方とってもきれいでまんまるだもの売ってるのみたいだからじゃないの」と持ちあげて眺めながら皆に言った。「ほんとだ。きれいにまんまるだ」「よし負けはないぞ、あっそうだ、先生何か型貸してよ」と型を探し出した子を見て、「ずるいぞ、Y枝ちゃんは自分でかいたんだから、みんなも自分でかくんだよ」と言わ

れ、一時は室中真けん丸描きがはじまった。でこぼこをなおしなおしているうちに小さくなりすぎて「チェッ」と舌うちをする子まで現れた。Y枝とS男とH子のコマから、そして同じ型の丸コマから、こんなにも真剣に丸描きができたことは本当に嬉しかった。

少しのだ門のどっばりを机にこすってひっこめようとする珍風景まで現れたのだ。そして「Y枝ちゃんやろう いちにさん」とY枝にちよう戦を申込んでまけた子はくやしがり、作りなおし、勝った子はとびあがってよろこんだり。「ぼく勝ったぞ——もういつこ作るんだ、紙の余っている人くださーい」とうれしきも手伝ってどなり出してしまい「静かにしないとうるさいよ」と言われて、「ごめんね」とすなおにあやまる男児が現れたりした。

・「きみのコマ、丸かと思ったら三角だったんだね、おもしろい」と、ほんとうにびっくりしたようにみつめていたZ雄、

「三角のコマまわすと丸になっちゃうね、ぼくもつくろう」とまねて作り出した。がなかなかうまくまわらない。そこでさっきの友だちのところに来て「まわらないよ、やってみな」と自分のをわたす。友だちがまわしてもまわらない。「どんがったの切ってみな」と言われZ雄は三角のかどを切りおとした、いびつの六角型ができとふたり顔を見合わせて笑っていた。そして皆の机のまわりをあるきながら、あまり大きくないボール紙の切れはしを探してまわしてみていた。そのうちZ雄が仲よしのU夫の所にいき、



このあそびをみて子どもたちはあそびながら、

・ コマの大きさと芯棒の太さとの関係

・ コマの大きさと芯棒の長さとの関係

・ 芯棒とコマの位置との関係をくり返したためしながら体験しているのにはおどろかされた。

「あーあ、あんなによくまわったコマなのにさつきからきゆうにまわらなくなっちゃった」

とささみしそうにコマを手にはC夫は室の中を歩きまわっていた。それを聞いてA男が「どれみせてごらん」と近づいてのぞいた。

「わかった、あんまりやったから穴が大きくなっちゃったんだよ」

C夫は「ちえっ、そんな」と言っただけで自分の席にもどろうとした時、E江が、

「穴が大きすぎる人は上と下とも一枚ずつ小さいのを作って入れるとよくまわるようになるし棒もとれなくなるよ」

と言った。そして自分でやったのが高くあげてみせた。

これを聞いてそばにいたF男が、

「そんなことするよりセロテープで棒とコマをはりつけなければぜったい安全だよ、それから色のビニールテープではとつてもきれいな色になってとくしちゃうよ」

と自分の意見を主張した。これは女児に人気があり、穴が大きくないう子までがカラーテープで芯棒をはりつけまわしていた。色がまぎって思わぬ色になるのをよろこび合って楽しんだ。「おかしいね、

四角いカラーテープなのにまわすとまぎっちゃうね。ミキサーみたんだよ」など話し合っていた。そこへ、

「あたし穴が大きくなったからマッチ二本いっしょにいれてまわしたの、よくまわったよ」

「それでもまた穴があいたから、こんど三本入れたのほらまわるよ」とK子がやって来た。このK子は言われたことやきめられたことはきちんとまじめにやるが創意のある子ではなかった。マッチを二本に入れてみたという事はK子にとって大した進歩なのだ。私はうれしくなってK子のつくったコマを一つもらったのだ。

◎芯棒の穴の修繕はこのように

・ 細いからだんだん太いのを入れかえる。

・ セロテープではりつける。

・ 新しい紙をおぎなう。

・ 二本、三本とふやしていれてみるなどを発見していったのである。そして「穴がすぐ大きくなるのわかったよ。釘ではじめにあける時、おくまで入れて、大きいあなつくるからだ。さきつちよで小さい穴にしとけばいいんだね」などと話し合っているグループもあった。

そして「よくまわるようになったと思うと、すこしたつと穴が大きくなるから、残念で、残念でたまらないよ」とげんこつでコマをたたいてくやしがり、「穴が大きくなならないように鉄でも先に入れてよいか、それだめだね」と子どもらしい考えもとび出したりした。

「Y男ちゃんのくずのコマだったらビュンとうなってるの」

自分の思うようにできあがらず、三つ四つ作ったコマを人にやりたり、捨てたりしていたY男は、しばらくクレヨンとハサミを持って、室の中をあるきまわっていたが、皆がおもしろそうにコマをまわしているのを見て、机の下にもぐり込み、落ちているボール紙の切れはしをひろいあげ、でっばった所を上を折り、まん中にマッチ棒をつつこんで力まかせにまわした。すると思いがけずビューンとうなつてよくまわる。Y男は手を叩いてとびあがり「ワイイぼくのうなりゴマだぞ」と大声でどなったりしていた。これを見て私はこんなことをほんとに拾いものをしたと言うのだな、と嬉しいやらおかしきやらでY男の顔をしばらく眺めていた。Y男の発見があつてしばらくすると、

「ぼくのはマホーゴマ」

と言ってS介が一つのコマを持って来てくれた。巾三cm、長さ六cmの長方形のコマである。「いちにのさん」と言つてまわしたコマは、風を切つてコスモスのように振がった。これは長方形のボール紙を三枚重ねて芯棒を通してあつたものだった。私は思わず「ほんとにマホーね。きれいな花ゴマになったじゃない」と言うのとS介はこれ以上笑えないと言うほどの笑顔をみせてくれた。すると、

「あたしの花ゴマきれいだよ」

とひまわりのような形のコマをK枝が持つて来た。

◎これらのうなりゴマ、マホーゴマ、花ゴマなどのあそびは、まわりの雰囲気があるが、その雰囲気があそびを途中で

やめさせず、小さい発見が次々と創意を表せるあそびに発展していったのだと思う。

◎活動のより上りと子どもたちの活動に対する積極性がこれほどひとり前進させてくれることを目のあたりみたことはなかった。

## II 自由あそびの時

「まわりますように、これはいなかコマです水ゴマです」

とひとりごとを言いながらT夫は直径一〇cm位の羽のついたコマを持って水道にいった。このあそびがやりたくていつもはおちついて食べるおべんとうも今日は残してしまった。コマを横にして水道をひねった。はねに水があたつてよくまわる。「先生ぼくのおばあちゃんちにこうゆうのあるんだよ。たんぼのところに」と嬉しそうに私をみあげた。そばにいた友だちがうらやましそうに眺めている。そして「T夫ちゃんどうやって作ったか、みせて」と手を出す子や、「もう少し水たくさんだしてみなよ」など注文する子などがでて大さわぎになった。しかし水車はだんだんぬれて、羽が一枚一枚とれて来て、紙がぐにゃとまがって、こわれてしまった。T夫は「紙だからしょうがないや」とあきらめ、「もういっかいつくってこよう」と室に入った。そこで私はモビールを作った時の残りのセルロイドの下敷を思い出し、T夫に渡した。そして「磁石あそびの時の針金を使ってごらんさい」と言つてその場をはなれた。T夫は「よし、これならいいぞ」と固いセルロイドを一生けんめい切つていった。五分後には水道でキャッキョッキョといながら上着のすそをびし

よびしょにして水車をまわしているのである。T夫のをまねて三人が水車を作って、いっしょにまわした。

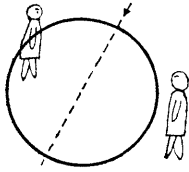
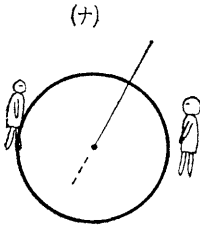
大分あそびつかれたので、翌日はもうあそばないだろうと思っていると、登園するなり道具戸棚からきのうのコマを持ち出してあそび出した。「先生ちがうコマ作りたいから紙ちょうだい」と言ってくる子が目立ったので、机の上にボール紙やその他の材料をまだしておいた。

「先生スモウコマができた。でもまわっている時は何だかよくみえないでしょう」

とA男はコマの両脇に相撲を立たせたコマをまわしてみせてくれた。そして「先生これまわす時はいっしょにくっついて、その次に半分に分れて、どっちがいつまでもまわるか競争できるのつくりたいな」と言うのである。(矢印からまわりながら分かれればと夢をふくらませている)

「みてみて、ほとくのピラまきコマだよ」

もう大部分の子が登園して来たころH男がどなった 皆いっせい



にH男のまわりに集まっただけ。直径五cm位の丸コマにマッチの軸を芯棒にさしてまわっているコマの上に、ちり紙をこまかくちぎってふりかけたり、まわす前にのせてまわしたりしている。まわすところがみが四方に散るのである。みていた友だちも楽しそうに笑ってみていたが、H子が「おり紙やった方がきれいだよ」と三枚の折紙を持ってきて手でちぎってのせてまわすと色がまざってきれいにみえた。皆「ワーきれいだよ」と、これもみんなに流行したのである。

「きかいつくる工場です」

S夫が直径一〇cm位の大きな丸コマを積木の間によこにしてすえつけ、足をふむまねをしながら、「ほとのお父ちゃん工場でこうゆうの使っておしごとしてるんだよ」と積木の好きな友だちと話していたが、次の瞬間、コマに息を吹きかけてまわしながら小さい積木の製品を下から転がすようにして工場あそびをしばらくつづけていた。

「ほとのコマは穴ほりコマなんだよ」

砂場のへりで三角コマをまわしていたO司が「土の上でまわすとコマ穴ほるよ、ほとのコマ穴ほりコマなんだよ」と言うので、みると、コマ芯棒が砂にめり込んで一点でよくまわっている。私がじっとみていると「先生、ひご竹のコマがいちばんよくほるのは、はしはだめだよ」と言って笑っていた。私のそばでみていたS枝が「O司ちゃんきのうみたいに鉛筆けずりでけずってみな、まわるよ」と教えていた。私は、なかなかいいことを言うぞと思って聞いていると、鉛筆けずりでけずって来たO司はさっそく砂を平になで、その



上でまわし、きつきよりよくまわるのでブランコにのっているS枝のところにかけていき「S枝ちゃんまわったよ」と報告した。これを見とどけて、私はもう一回室に入って見た。すると、

「ハターになーれ」

と言いながら、三人がコマのまわっているまわりをぐるぐるぐるまわっているのである。私が入って来たのを見て、「先生、チビクロサンボだよ、トラなの、このコマねー」と言って「ハターになれ」とまわりだした。私は子どもたちの夢の世界のきれいなのにうっとりしながら眺めていた。

すると私の足もとで、

「コマがじゃれつたがつてるよ」

と聞こえたので我にかえって足もとをみると○子がコマをみつめて手を叩いている。コマは床の板の間に芯棒が入ってしまつてゆれながらまわっていた。私が見たので○子は「先生困つてら、でなくてね、じれつたがつてるの、じれてんだね」と言うのである。私は心の中で○子ちゃんに似てるねと言つて笑いかけておいた。

「ここはダンス場です」

とY男がみんなよびかけている。みると、床に白ぼくで絵をかき、その上でコマをまわしている。「ダンスしたい人はここでまわしてください。ホークダンスです。コマのホークダンスはこちら」

と呼び、よびごえにつれてみんなコマを持ってまわしにいった。たちまち二〇個位がまわりだした。

するとY男が「一かいだめになった人はあかの中で踊るの、二かいだめになった人は青の中で踊らせな、踊るのはまわすことだよ」と新案を出した。このあそびは一〇分位続き入れかわり立ちかわり、まわし合っていた。(こんなことをよろこぶのだなと思つて他に目をうつした)これを少しはなれたところでみていたK夫が、

「コマがみんなのみて笑つて、僕の手くすぐつたよ先生」

と言つて私のそばにそつとやつて来て、手の平でまわしてみせてくれた。

次の朝私が室に入つていくと、空箱を入れておくダンボールがひっくり返されている。みると、

Ⅲ 空箱利用のコマを作っている。

A男やS男、A子にY夫たちが釘やビニールテープ、ホッチキスなどを使って立体的コマを作つてはまわしていたのであった。

1 マーブルの空箱を芯棒にして先をつぶしたコマ・芯棒が太いので両手でいっしょうけんめいまわしてみる。力の入れ方ですぐいきおいよくまわるのでよろこぶ。

2 マーブルのふたにマッチ棒の芯を入れたコマをまわしたりしていた。(これは芯棒とふたのおもさがちょうどよく、いつまでも長い時間まわるコマができた)

3 マッチの外箱にマッチの芯棒のコマ

・マッチの葉のついた方を下にしてまわすとまわることを発見。

4 タバコの空箱にわりばしの芯棒を入れたコマ

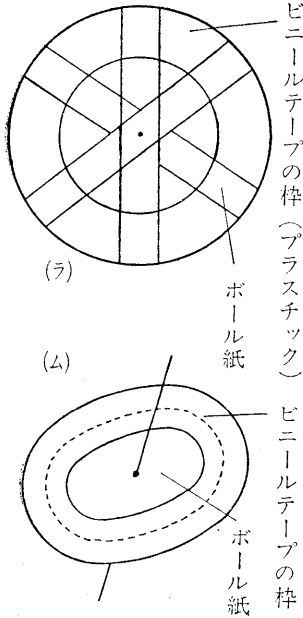
・ビニールテープでいろいろもようをつけたコマ

・人間のように首と手と足を画用紙で作ってはりつけたコマ。(芯棒をつっこみながら「おへそだね」といつていた)このコマは中心がとれにくく、何回も何回もやりなおしていた。一番よくまわったのが手と足にわりばしを折ってつけたコマだった。これを見て子どもたちは「こんな重くても中心がきまつてるとまわるね」と私がねがってもない発見をしてくれたのである。

5 カラーのビニールテープのまいてあった枠にボール紙をはりつけたコマ。ボール紙をさしわたしてビニールでとめ、竹ひご芯棒とおした。(ウ)

芯棒とコマの位置のバランスが合つてくると力づよくよくまわった。

これを見てもうひとりの子がビニールテープの枠の上に丸いボール紙をかぶせて竹ひごを通してまわしていた。(ウ)どちらも同じ



ようにまわったが、後者のほうが早く芯棒の穴が大きくなることを子どもたちは発見していた。

その次の日の朝、T男がかなづち

でどンドンやっているのでいってみると、

6 ビールの王冠に釘をうちつけて、芯棒にし、さかんにコマを作っていた。

私が「いいこと考えたわね」と言うとうん」といいながら「先生、釘が太いとよくまわらないし、長くしてもだめ、この長さがちょうどいいよ」と言って中位ののをまわしてくれた。ほんとうによくまわる。私もまわしてみた。指先にかんずる金属せいの重量感がころよかった。これをみながら私がいろいろまわしている時、電話がかかったので、その場をはなれて電話にでた。するとT男が二、三名の子といっしょに「大発見だよ——先生大発見、大発見、大発見」と職員室になだれこんで来た。話している私の目の前でひとつのコマをまわしてみせた。

「ねえ、すぐくまわるでしょう。いままでいっとうまわるね、ぼくが発見したんだよ、ちょっとやってみたの」とT男が息もつかずによく顔中まっかかして話してくれているので、私は電話の相手にわけを話し、しばらく待ってもらった。そして手にとってそれをみるとそれは、

7 ビールの王冠の中のコルクに小さい釘をさしたコマなのだ。なるほど音もなくよくまわる。それをみて私が「ほんとによく発見



したね」というとT男は「先生まだあるんだよ。こっちは釘をきかさしたほうだよ、やっぱりとんがったほうのがよくまわるでしょ」と言う。T男は発見、発見と職員室に入って来るまでに何個もいろいろとやってみてたのだ。そして最後に、釘とそしてその位置とがピッタリ合ったコマができてよくまわったので、私も電話のつづきを忘れていっしょによるこんでしまった。

この発見は男の子全員に流行し、女の子もかなづちでとんとんと釘を打ちつけて作っていた。この日、私は計画を変更してビールの王冠ゴマのちかぬき競争をやってみた。一〇〇個近くあった王冠と磁石あそびの時の残りの釘はすっかりからなくなってしまった。子どもたちはよろこんで、おべんとうのあとも、そここでちかぬき競争をしたのしんだのである。

以上が私の学級でのコマあそびである。この経験から、私は、この位の抵抗のある教材でも子どもたちは頑張つてくり返しくり返し、あそびを発見させていくことができる力を全員がもっていることを知ることができた。さらに、この位の抵抗は、しゃぼん玉や磁石のように無抵抗のくり返しより、手ごたえがあり歯をくいしばって前進しようとする力づよさを表してくれることがわかったのである。そして与える前にあんなに心配していた私がおかしくなり、恥かしくなってしまった。子どもたちを少しは知っていたつもりなのに私どもは何にもわかっていなかったことが証明されてしまった。子どもたちの持っている力をもっと科学的にたしかめ信じなくては

申しわけないとしみじみ感じ、教師顔をしていた自分が恥かしくならなかった。この活動をふりかえってみると、

◎このコマあそびがここまで発展したのはシャボン玉や磁石あそびの経験があったので組全体の子どもたちが活動に対して、これだけ楽しくあそぼう、失敗したらやりなおせばなんとかなる、という、失敗のチャンスをうまく使っている」とする雰囲気が出ていたので、ひとりの落こ者も出さずにすんだのであろう。

◎そして、この活動の中でみのがしてならないことは子どもたちの確かめのくりかえしの方法と発見のしかたはおとが考える理くつでなく、体全体でぶつかっていく、くり返しであり、たしかめなのである。まず全身の神経を指先に集中させて、いろいろのコマをいろいろのやり方でまわす、その時の真剣さは指先だけでない。体全体で小さなコマにぶつかっているのである。そして、ちょっとしたちがいを何回かのくり返しの中から身につけ、それをもとに、いろいろの空想と創意を小さなコマに集めているのである。

この力強さ、小さな幼児の中にあふれる無限の力におどろく。そして、子どもたちのくり返しとがんばりの力は、全身の感覚をとおして、その子なりに身につけていくのであるということも知らされたのである。

ひとりひとりの子どもたちをしっかりみつめ、受けとめ、子どもといっしょに失敗を積極的に変化させていかれるような失敗のチャンスと教材を、科学的に考えてたしかめなくてはと思うのである。

## 私の園の試み



浅羽睦子

子どもは、成長の過程の中で、目にふれるいろいろなものに働きかけながら、認識能力を育て、情緒を豊かにし、試す力や考える力を身につけていくようです。

この過程の中で保育者の役目は、子どもたちのそうした働きかけが発達段階に応じた無理のない形でなされ、その段階での可能性を充分に展開できるように仕向けることなのではないでしょうか。

そこで、「自然」についての指導法を考える上には、その時の子どもの中にあるレディネスを充分に把握すること、可能性を実現させるための適切な働きかけ方をつかむことが必要となってきました。

こうしたことから私たちの研究がはじめられたわけですが、「自然」の領域と一口にいても、その対象は無限とっていいほど広く何から手がけたらいいか見当がつかない状態でした。

一方、今までいわゆる「研究」というものについてふりかえってみますと、統計のための資料を集めることにのみ力をそそぎ、それが直接、保育の場につながってこない結果になったり、また、ある問題について考えだすと、それにだけ集中して、他の領域、ひいては子どもの生活全体がなおざりにされる傾向があったように感じます。

そこで、私たちは「研究」のために保育の流れがゆがめられることのないように、またそこから生まれた結果が、単に説明に終るのではなく、直接に保育に結びつくような具体的なものになるようにということに努力してみました。

その意味から、研究の対象としては、全体計画の流れの中にもられた身近な経験をいくつかとりあげ、そこにでてくる子どもの動きに保育者が考察を加えていくという形をとってみました。

結果として統計的処理や、分析ということが行なわれていません。

次に私たちが試みに概要を記し、御指導をいただきたいと思いません。

### ●研究の意図

- (1) 幼児の自然に対する興味、関心の向け方が年齢によってどのような特徴をもち、どのように発展していくかみる。
- (2) (1)の結果をほんとうに生かすには、どのように働きかければいいか考察する。

### ●研究の方法

行動観察の記録と考察

- a 自由あそびの状態
- b 設定場面の中で

### ●観察の態度

- ・ありのままの姿をとらえる努力をする。
- ・幼児の言動を大切にす。
- ・教師の意図のおしつけをつとめてさける。
- ・見方、考え方、反応などできるだけ把握してその日のうちに記録をまとめる。

●対象とする経験は、「見る」「いたわる」「集める」「扱う」の各面からとりあげる。

(注) 幼児の自然に対する経験は、具体的・総合的なもので生活に

直結する場合が多く、決して内容をバラバラに切り離して考えられるものではない。しかしここで自然の指導について考える手がかりとして、これらの経験を前記の四つの面(文部省の自然指導書による)からこまかに眺め、その上になたって考察を加えてみた。したがって、このような分類は、たまたまとりあげた経験が、その一面だけで扱われるという意味ではなくて、ただ検討のために重点をおいたという意味である。

次に、私たちの研究集録の中から一部をとりあげて記します。

(保育の中で玩具をどの程度与えたらよいか——「扱う」という面を中心に——)

### ●主題をとりあげた理由

自然の指導書の中で「扱う」の望ましい経験の一つに「玩具であそぶ」がとりあげられている。しかし今まで玩具の与え方について「扱う」という面からあまり考えられていなかっただけに、その段階的な考え方が明かでない。そこで本園の幼児の実態の中からこの問題を考えていくために 実験的に玩具で自由

に遊べる場を設定してみた。

●記録の方法

・観点……○どんな玩具にどんな興味をもつか

- 1 年令的な特徴
- 2 性別による差はどうか
- 3 経験による差はあるか
- 4 積極性による差はどうか

・期間 六月～七月

・場所 保育室

・時間 一回約30分

・条件 玩具の中から好きなものを使ってあそぶ。使用法は事前に指導しない。

・対象 4 歳児80名 5 歳児90名

・使用玩具

- 1 動力玩具——オイル車、バトカー、ヘリコプター
- 2 ゼンマイ仕掛——消防車、ヘリコプター
- 3 電池仕掛——線路つき石炭車、ハシゴ付消防車

(今回は特に乗りもの玩具にかぎる)

●記録A

・対象 年少児45名

・グループ編成——生活グループごとに玩具を分けたが結果的に、

このグループは無視され実際には、電池仕掛の石炭車と他の玩具での遊びに二別されたので記録はこの二つを対象としている。

遊びの流れ		考察の手がかり
<p><b>A (電池の石炭車)</b></p> <p>▽皆の興味が石炭車に集るが勢力のある子どもに独占される。ほとんど全員の子どもがこの玩具にとびついてきたが皆で協力してあそぶことができず、ほとんどの子どもはだんだん他の玩具に移って3名の男子が独占する。</p>	<p><b>B (他の玩具)</b></p> <p>▽石炭車からはなれた子どもが他の玩具であそびだす石炭車であそべない子どもたちが観光バスなど</p>	<p>▽全体に好きな玩具でという指示だったので、初めは、形の複雑な珍しい石炭車に集ったようす。</p> <p>▽子どもの動きからみてもあまり交友関係も深まらない時期でもあるので、一つのを皆で使うことはできない。まだ一人ひとりが独占してあそぶ段階のように感じる。</p>

●記録B

・対象 年少児 28名

・グループ編成—— a

b 電池でない玩具

電池で走る石炭車

・条件 二回とも同じ子どもに同じ玩具を与えて、「これで時間が来るまであそびましょう」と指示する。

●記録C

・対象 年長児 40名

・グループ編成—— a 組内で勢力のある子ども(男)

a' 〃 (女)

b 組内で勢力のない子ども(男)

b' 〃 (女)

●記録D

・対象 一年保育児

・グループ編成 A 電池を使う玩具に経験がある

B 未経験 その他

以上の記録を綜括してみると、

玩具に対する興味のもち方、その扱い方には、かなりはつきりした年令的な段階があるようだ。

4歳児では玩具を自分のからだの一部として使い、玩具といっしょになって走りまわっている姿がみられる。この段階では、自分のからだの一部として動かすことのできる玩具でないと遊びの道具として意味を持たないのだろう。

この年代の子どもにとっては、単に外観のちがいが興味の対象となるのであって、その構造やしくみの違いは、まったく意味のないものらしい。

こういったことから、4歳児に構造のちがいやどうして走るのかといったしくみのちがいがいなどに関心を向けさせることは、発達的に少し無理なように感じる。したがって、みて気づく、みて楽しむといった高度な玩具を与えても、単に驚異的な興味や関心をひくこと以外には、あまり意味がないと思われる。この時期では、高度なものを与えるよりも、自分自身で扱えるもの、自分自身でかかって遊びを創造できるものなどを充分に与えることの方がよいのではないだろうか。

5歳児になるとやや玩具を客観的にみて楽しむようすがみられる。そうした中で、「どうして動くのか」「こうしてみたらどうだろう」というような発見やくふう、疑問などがかなりみられ、それをお互いに発言し合うことによって友だち同志にも広がっていくようである。

この点からみると、しくみのちがった玩具を与えて比べさせたりかなり高度なしくみの玩具を与えることがある程度可能である。またそれが機械的な玩具に対する興味や関心を高めるといふことで、望ましいように思われる。

しかし、その後の発展からみると、ただ単にみて楽しむだけの高



度なくくみの玩具は、その玩具のもつ技能以上には遊びを發展させることがむずかしく、その場での好奇心を満足させることだけに終っているようにも感じられた。

それに対して、自分の手でも自由に操作できる玩具の場合は、その玩具を中心として、積木、机などを使って道路をつくったり、トンネルをくぐらせたり坂を競走させたりなど、いろいろ遊びを發展させながら気づいたり、たしかめ、くふうしている。

こうしたことから、幼児の疑問や興味、ためしてみようとする意欲を更へのぼすためには、じぶんで自由に操作のできる性質をそなえていることが重要な条件になると思われる。



(この他、四つの面よりとりあげた経験については、研究集録「自然とあそび」を参照)

私たちは、この研究をとおして、今までにもくり返し言われてきたことであるが、次のようなことを再び痛感しました。

○自然に対する興味、関心の向け方には、かなりはつきりした年齢的特徴がみられる。どんなあそびをとりあげる場合にも、発達に即したとり扱いを考へることが必要であろう。ともすると、より高い程度へとあせりがちであるが、その段階に即した経験を充分

に積み重ねることが、将来の科学的な芽をはぐくむ重要な土台となるのではないか。

○幼児の自然に対する興味や関心のたかまりは、小学校での理科のように単独の教科として学習されるものでなく、あくまでも総合的なあそびの中の経験として育てられ、他の領域によって更に広げられ、強められてくるようである。この意味からも、自然の指導は、他の領域とのからみ合わせの中で行なわれるべきであろう。

また、幼児の働きかけ方にかんがりの個人差がみられたのですが、この点、指導の場面でどう扱っていったらいいのかということが今後の大きな問題点となってきました。

この個人差は、どのようなことから生れてきたのか、ひとりひとりの動きからみると、必ずしも、知能との関係だけではなく、全ての生活に対するエネルギーのようなものによっているようにも感じられました。

幼児の自然に対する興味、関心を育てるには、もっと広い意味でその子ども自体の指導を考えなくてはならないようです。

こういった点から、今までの保育の中で私たち教師のとつていた役割をもう一度、みなおしてみたいと思っています。

(江戸川区立松江幼稚園)

# 「無口な子」の指導事例



金子 徳 恵

入園当初は、例年のことながら、マンモス団地という人為的環境の中からくる子どもたちのなかに、集団不適応児が数人いた。これらの子どもは、泣いたり、母親にくっついたり、ひとこともしゃべらなかつたり、また、非常におちつかず、衝動的行動がおおいなど、それぞれの反応を示した。

この不適応児を、一日も早く集団生活に参加させるには、どのように指導したらよいか。いろいろ考えた結果、次のような方法をとってみた。

## (1) 各種調査からの考察

地域環境調査、家庭環境調査、家庭訪問、知能テスト、社会成熟度診断検査から、原因及び入園前の状態を考察する。

## (2) 行動観察法による指導

・観点 1、個人(自主、自律)

- 2、友だちとの関係
  - 3、教師との関係
  - 4、クラスとの関係
- ・行動記録

- 1、できるだけ具体的に、行動を描写する。
  - 2、その行動を考察し、適切な指導をくわえる。
  - 3、それによってあらわれた、子どもの反応をみる。
- 以上のような方法により、各児の指導にあたってみた。次の例は、なかでも重症とみられた、A子の場合である。

△無口な子▽

A子

## 概略

性別 女、生年月日 昭31・9・21、保育歴 二年年長

1. 個人

月	行 動	考 察	指 導	反 応
6	はじめて「おはよう」とあいさつをする。	前日に家庭訪問をしたので急に親密な感をましたら	「きのうA子ちゃんの家へいったわね。新宿住宅なのね」といってやる。	うれしそうに、ここにこして、その日は何回も教師のそばにくる。
6	金魚をみたり当番札をみたり、部屋中散歩する。	はじめてみる部屋のように、立ち止まったりしてふれたりしている。非常に大きな気持の変化がおこったようだ。	呼びかけずに、そっとしておく。	
7	七夕かぎりの製作を最後までやる。だまってる。	教師の話をよくきいているので、仕事事がうまい。	皆の前で作品をほめてやる。	得意そうな顔をする。
7	1学期間1日も欠席をしなかったの、皆の前でほめられる。	前年度の3分の1期今学度で、興園生活に対する本人も相当努力したようだ。	「1日もお休みしなかったえらかったわね、がんばったのね」とほめて自信をもたせる。	あとで「もう、ずっと休まないよ」といいにくる。
9	運動会の競技リズムの練習に興味をもつ。技のルール要領などを早くおぼえ真剣にやっている。	かけっこなど友だちが笑うほど、剣剣な顔を的意にしている。このこと気づいた。	1番になったときは大声で「1等賞」といってやる。友だちが「すごい」という。	わぎとくふらよらめくような教師にもたれてくる。嬉しさを体で表現している。
10	ふくろうの指人形をはめ、動かして部屋一周する。	指人形は次々ときがくるので、たまたまとえたいやりの子がいたり、あなつみ		

まとめ・幼稚園に対する興味がでてき、喜んで登園するようになった。・いつも自分の席にばかりいたが、今では自由に活発に行動できるようになった。

問題点

今年度

- 一、誰もしゃべらない。
- 二、友だちができない。
- 三、集団にいれても、いつのまにか一人になってしまう。

前年度

- 一、欠席が多い。
- 二、作業に好き嫌いが多く、ほとんどのやらない。
- 三、友だちといっしょにあそんだり、しゃべったりしない。

一―四表に示した指導例をまとめ、総合的に考察してみると、次のような経過をたどってきたことがわかった。

B子の非社会性は、入園後、半月位であらわれてきた。不適応の

外見 非常に發育良好で体格がよい。いつも落ち着いている。



### 3. 教師との関係

月	行 動	考 察	指 導	反 応
6	教師からあいさつをされても返事をしない。	まわりに友だちが2, 3人いたが、あいさつがでなかつたらしい。	「おはようございます」と呼びかけたが、反応がなかったのでもそのままにしておく。	ちらっとみても、きこえないふりをしてる。
6	髪をきれいに分けて、リボンをつけてくる。	家から走ってきたはよすである。うれしげな顔をしている。	「きれいね。だれにやっていたの」ときく。	「おかあさん」と大きな声でこたえる。
6	前日と違う髪をしてくる。		「きれいね。きのうとちがうのね」	「うん、またおかあさん」
6	また違った髪をしてくる。	毎日変えてきて、うほめられるのがうれしらしい。声をかけられるのをまっているようだ。	「きょうもきれいなね」「A子ちゃんのお母さんはじょうずね」	「うん、お母さんなんでもできるよ」
7	毎朝必ずあいさつをするようになる。	保育室に入りながら、目で教師の姿をもとめる。	あいさつのほかに必ず何か話しかける。	小さな声で断片的に答える。
9	「お便所に行っているですか」とききにくる。(この日は3回くる)	何か教師に話しかけたいようすがみられる。	「どうぞどうぞ」とわざとおどけていってみる。	おもしろそうに、笑いながらでている。
10	指人形をはめ、部屋をまわりはじめ、行動をとる(前日途中で人形と出会った)。「これはなにさ」といって答えず。	前日にくらべて、のびのびと人形を動かしながら歩いている。	人形を持ち、反対側から歩いていき、「こんにちは」とよびかける。	不意だったので、返事をつづけてしまったり、いそいでさがる。

まとめ・家庭訪問以来、急速に教師に対する近親感がわいてきた。・教師の意図的な話しかけも素直に受けられるようになった。・自分から教師に話しかけるようになった。

症状として、無口、孤独の傾向がみられてきたのである。調査(家庭訪問、書類調査、母親との話し合い)の結果、次のようなことがわかった。

① 3人姉妹の末子で父親が非常にあまやかした。また、男児用玩具を与え、ボクシング、チャンバラ、じゅうどうなどの遊びを教えた。服装も、スカートより半ズボンの方が多く、男児のような育て方をした。非常に体格がよく力が強いので、いつも姉たちより優位にたち、わがままをとおし、意のままにふるまってきた。

② 母親が職業をもっているのが、3人です番をすることが多かった。そのため、外にでることが少なく、ひとりも友だちができなかった。

以上の事から問題行動の原因は、不満、不安、劣等感、あやまったし

4. クラスとの関係

月	行 動	考 察	指 導	反 応
7	当番札をみて立ち止まり、自分の名前がみえているのをかえり、鳥のあたりを自分の席にすわ	初めて当番の仕事をする。内容の細かい水かきから、急いで意識したらしい。	「きょうはお当番のうさぎは、小鳥のうねうねとめてやる。」	当番の仕事と他をよくこなし、ひらなしゃべらない。
7	皆といっしょに七夕作りのかざりに「A子ちゃん早くてじょうずだよ」といわれる。	教師の話をよくきいているので、仕事の手順がうまい。まわりの子が製作面に能力のあることを発見し、A子の存在を認めできたらしい。	みんなの前で、作品をほめてやる。	とくいそうな顔をする。
9	リズム遊びで自由にグループを作る。ひとりぼっちになった。次の3人組になるときはできた。	自分から進んで手をつなごうとしたので、最後に残ってしまった。	「A子ちゃん、はひし度な今度まにまに全員に呼びかける。」	3人組だと、端数がでないので、友だちに呼ばれて、やることができた。
10	全員でやる椅子とりで、がんばって1番になった。	非常に興味を示し、最後に3人残ったが、周囲を気にすることもわすれ熱中する。	教師が「A子ちゃん、がんばれ、他の子どもがまねして「A子ちゃん、しっかり」と応援しはじめた。	
10	ひとりずつやるスキップの順番がまわって正しくリズムになっている。	今まではひとりで行ったが、今日はよくやる。椅子とりで自信がついたようだ。	声をかけることにやし、皆を意図しないので、だまっていた。	
10	ペーフ・サートを作り、劇あそびをすげ打合せを始めて、友だちの動きをあわせて形を動かす。せりふはいわない。	全員の前でも気がすまなかった。友だちの意見はよく聞いて、自分いらない。皆の前でやれるのでううだ。	ひとりひとりの動きをほめ、声をいう。最後に「A子ちゃん、さうなうなう。」	「もう」と大きな声でいう。 A子ちゃんのほんとの牛みたいね もう1度「もう」といったので、皆がおもしろそうに笑う。(好意的)
まとめ・クラスの当番を、喜んでやるようになった。・友だちに認められ、クラスの位置づけが安定してきた。・さそわれれば、グループに入れるようになってきた。				

つけ、と  
考えられ  
たのであ  
る。  
そこで  
無理なく  
早く適応  
させるた  
めに  
①集団の  
中での  
位置づ  
けを安  
定させ  
行動に  
自信を  
持たせ  
る。  
②友だち  
から承  
認され  
るよう

にしむける。

③緊張を解消させる。

④のびのびと、おもしろのままにふるまえる環境をととのえてやる。のびのびとポイントをおき、上記の問題点の解決をはかった。

その結果、前年度の問題点

①は、教師と母親との緊密な連絡により、幼稚園に対する興味を持続させ、登園を習慣づけたのである。

②は、能力はありながら気分が左右され、やらないことが多かった。そこで、いつも作業の結果を友だちの前でほめてやり、自信をもたせた。

③は、教師が誘導し、いっしょに遊びにいられても、すぐ席にもどってしまふ。このような状態がくり返されて、ひきつづき今年度の問題が残されたのである。

そこで友だちより教師と、自由に話し合えるように、できるだけ交渉を持つようにしたのである。はじめは、教師の呼びかけが多かったが、家庭訪問をきっかけとして、意外に早く問題がとけてきた。教師に対する近親感がましてから、積極的に話しかけてくるようになった。

次の段階として、教師が媒介となり、友だちと話せるようにしむけてみた。だが、これはなかなかうまくいかなかった。教師に対しては、信頼感と親密感をもって、無条件で受けいれてくれるが、友だちとなると、劣等感から生じる抵抗があるようである。しかし、

教師との関係がふかまるにつれて、じよじよに緊張感が解消されてきたようである。また、作業面、運動面での能力も友だちに認められてきたのである。そしてある程度、気持が安定してきたとき、自分と共通点を持つK君を発見した。他の友だちとちがいが、何の警戒心も持たずにふるまえるので、急速に仲よくなっていったようである。今ではふたりで、なにか話し合っている姿が、ときどきみられるようになった。このように1番目の友だちが得られたので、次にふたり、三人と、次々に交友関係が広められるにつれ、問題が解決し集団に適應できる日もまじかではないかと考えられたのである。

(註) 卒業期には、他の子どもとほとんど変わることなく、楽しい園生活を送ることができた。子ども会の劇には、進んで役を引き受け、せりふも、じょうずにこなした。

### 参 考 資 料

- 一、家族関係 父(四七才) 公務員、母(三五才) 会社員、姉(八才) 小三年、姉(七才) 小二年
- 二、入園前の状況 水痘が重かったほかは、ほとんど病気をしない。姉ふたりがいたので、他の友だちとあそぶだことがない。
- 三、知能指数 田研B式 IQ 一一〇
- 四、近隣関係 母が仕事をもっているため、近隣との交際はあまりない。
- 五、地域環境 住宅地、マンモス団地(アパート)

これは昭和37年度新宿区立幼稚園教育研究会の際に研究したものである。(新宿区立西戸山幼稚園)



# 倉橋賞を

## 受賞して



### 井上範子

についてであった。その時はまだこの道に入ってまもない時だったので、何もわからないままに日本女子大学で開かれた第十回大会に発表させていだいた。後から常任委員の先生の一人に「いい発表で倉橋賞の候補に上

る。私は思いきってとりあげることにした。それ以来数年来の資料ととりくみ、毎日ぼろ大な数字にとらめっこし、苦手の算盤や計算器をつかう毎日が続いた。非常に苦しかった。しかし光明を求める楽しい一歩一歩でもあった。

この度、日本保育学会第十六回大会において、「現行幼児知能検査の吟味―幼児の知能測定における問題点―」という研究発表で倉橋賞を受賞することができた。これは幼児教育にたずさわるものとして最高の栄誉であり、私は感激で胸が一杯である。

私は大学卒業後直ちに現在の幼稚園に勤めたが、はじめのうちは何もわからず無我夢中であった。しかし、私の園の理事であり、また香川大学の心理学を担当しており、また先生から「何か問題をもって努力することが大切である」と言われ、それ以来何か問題をもって努力するよう気をつけている。最初に取り上げた問題は、集団指導における適期教育としての幼児の音感教育

だったのですよ、しっかりとやりなさい」といわれ、それがたとえはげましのことばであったとしても私にとつては非常に嬉しいことであつた。それからとにかく一生懸命やつてみようとという気持で頑張り翌年は広島で発表した。それからもう六年にもなる。

今年の発表は数年前から一度整理して発表したいと思ひ続けていたものであるが、問題が問題だけに現場の一教師がとりあげる問題としてとはと、いくたびか躊躇した。しかしテストを行なえば必ず個人の知能指数の間には差が起つてくる。父母にどう説明すればよいか？ また教師自身、どのように解釈したらよいか。なやみになやんだ。しかしいつかは解決しなければならぬ大切な問題であ

つた。今年度の発表は数年前から一度整理して発表したいと思ひ続けていたものであるが、問題が問題だけに現場の一教師がとりあげる問題としてとはと、いくたびか躊躇した。しかしテストを行なえば必ず個人の知能指数の間には差が起つてくる。父母にどう説明すればよいか？ また教師自身、どのように解釈したらよいか。なやみになやんだ。しかしいつかは解決しなければならぬ大切な問題であ

る。私は思いきってとりあげることにした。それ以来数年来の資料ととりくみ、毎日ぼろ大な数字にとらめっこし、苦手の算盤や計算器をつかう毎日が続いた。非常に苦しかった。しかし光明を求める楽しい一歩一歩でもあった。

さて、私は学生時代に「人間の性格は幼児期に形成される」というフロイドのことばにひかれ、その「幼児期の教育こそ教育の中でも最も重要で難かしい問題である」という今はなき長田博士の講演にはげまされ幼児教育にたずさわることにした。

今にして思えば私の選んだ道は正しかったように思う。しかしこの道は困難ないばらの道でもある。私は倉橋賞受賞の感激をしつかり胸にだきしめ、困難ではあるが生甲斐のある幼児教育に精進していきたいと思つている。

最後に発表の機会を与えて下さった学会、絶えずはげましつつ御指導下さった先生方、研究の場を与えてくれた幼稚園、その他陰の力となって協力してくれた方々に対して「本当に有難うございました」といって結びとしたい。  
(財団法人幼児研究所 高松幼稚園)

# 乳児期における 社会性の発達

(その二)

丹 羽 淑 子



児 童 発 達 講 座 ⑤

## 乳児の情動発達を通じてみた社会関係の発達

(生後二か月より)

私どもは先に、乳児期の社会性発達の過程をたずね、一方においては、生来的に装備されたわずかなはたらきのほかは主として内部知覚のみに反応して生きている事実を明かにし、他方において、頼りない存在である新生児が徐々に外的刺激を受容することのできる

段階に生長して外界との交渉をもつに至ることに注目してきた。そして個体における知覚の発達に伴って、外界の刺激のうち、とくに人的刺激に対する反応はことごとく、情動を通じて出現することを見出した。それで、二か月以後の乳児の社会性発達の研究はもっぱら、情動生起の様相と、その変化を取り上げ、その刺激条件を分析することに重点がおかれる必要がある。このような目的のためには、前述のように、縦断的に直接観察を継続して一年間の全体的な行動発達の諸相の中から、社会的刺激に反応した行動を発見月日にしたがって整理し、そこに社会性発達の過程を見出す方法(多くの観察者がおこなった)と、集注的に一定の刺激を統計的に妥当な員数になるまで、各年令段階の乳児に与えて、その反応をみることによって一般的な発達の型を、より精密に検討する方法とを併用する必要がある。

そこで、新生児期にあらわれ始めた微笑現象を更に、実験的、横断的に追求して、一年間の微笑反応の発達パターンを検討し、あわ

せてその刺激を分析して、乳児の社会関係の変化をたどってみようとおもう。そうすることは必然的に、消極的情動、たとえば、不安情動にも関係することとなる。かくして、横断の実験観察の結果は、継続的におこなった縦の発達とあわせ検討されるであろう。今回は後者の場合を詳細に記述することを省いて、横断的研究に重点をおき、その結果を資料として考察することにしよう。以上の順序にしたがい、情動の発達を通じて乳児期の社会関係のパターンと、その意義を考察し、対象関係成立の成功および不成功がその後の精神発達や性格形成に及ぼす影響について、正常なハターンから逸脱する場合を参照しながら考えてみよう。

#### 四、微笑反応と社会関係

##### (一) 乳児期の微笑現象に関する実証的研究

乳児の微笑が心理的現象として発達心理学者のあいだにとりあげられ始めたのは四十年ばかり前からのことにすぎない。その多くは、<sup>(1)</sup>児童心理学者の手によって、個々の乳児の発達が伝記的に叙述される過程において、微笑や笑いの<sup>(2)</sup>ピッグの時期やその表出状態が述べられたものか、または、精神発達を測定する過程に観察された資料に基づいて考察されたものである。微笑や高笑そのものを、系統的に別個に研究対象として取り上げたのは、ワッシュバーン

WASHBURN, R. W.、ゴエラー夫人 BÜHLER, G.、デニス DE-  
NZIS, W.、カイラ KALLA, E.、スピッツ SPITZ, R. A. の五氏で、  
一九三〇年前後から始められたものである。

私はまず、これらの研究者が微笑に関する研究をおこなった足跡をたどってみることとしよう。

<sup>(3)</sup>ワッシュバーンはスフーンを落したり、膝を急にまげたり、玩具を差出したりしない、バーなどのいろいろな場面をつくり、子どもの笑いや微笑の実験をおこなっている。彼女の実験結果は、(1)無生物だけでは微笑がおこらないこと、(2)成人の微笑した顔に反応した、(3)微笑のおこる時期は一二週から四〇週で、その後は社会的刺激が、社会的微笑をおこすのに不確実な時期で、四〇週をすぎると、社会的刺激が必ず社会的微笑をおこすと結論している。

また彼女は母親の年令と、子どものわらいの程度との関係を考察し、年若い母親の方が年老いた母親よりも、子どもの微笑をおこす率が少ない(相関 $\cdot$ 四一、 $\cdot$ 四五)と述べている。彼女の実験結果の(1)(2)はビューラー女史その他、後になされた、より精密な実験結果とほぼ一致している。しかし彼女の実際には不備のあることを指摘しなければならぬ。それは第一に、観察をおこなった子どもの数がわずかに一五名に過ぎず、その観察回数も一五人中四人を八回、その半数が五回乃至それ以下である。このような小例をもつて結論することは冒険である。また実験も被験児を母親の膝の上に

表 1 社会的笑いの分量 ビューラー

月令	成人に 対し	他の 子に 対し	供 に 対し	計	一般的 反応の 分量
1	—	—	—	—	—
2	100	—	—	100	—
3	89	—	—	89	11
4	92	—	—	92	8
5	60	15	—	75	25
6	50	—	—	50	50
7	49	13	—	62	38
8	20	30	—	50	50
9	10	40	—	50	50
10	40	30	—	70	30
11	25	50	—	75	25
12	10	40	—	50	50

抱いたままの状態でおこなっているの、厳密に刺激を統制したことにならない。

ビューラー女史は一九二七年に研究を発表しているが、これによると彼女は直接観察をおこなって微笑の現象と意義を考察し、子どもの微笑はその当初から、社会的現象であるとし、二か月末の乳児に微笑をおこさせる唯一のものは成人の顔であり、子どもは成人の笑顔に反映して(6)微笑すると述べている。なおまた、乳児期の一般的反応に対して、社会的な微笑や笑いがどのような割合でおこるかを調査している。(表1参照)これによると、一般的予想を裏切って、初めに社会的笑いが発生し、次いで一般的な他の反応が分

化することが明らかにされている。社会的刺激もまずはじめに(三か月)成人に対し、ついで、他の子どもに、(生後五、六か月頃)おこると述べている。さて、ビューラー女史の微笑に関する解釈は直接観察を通じての巨視的な観点からな

れたものであるが、その後に、より分析的実験的に観察した結果とよく一致している。微笑をおこさせる刺激の問題については、なお再検討の余地がある。ビューラー女史は、それを人間の音声と視覚的にとらえた人間の笑顔であると述べているが、この点を独自の実験方法をもって明らかにしたデニス夫妻の報告にみてみよう。

(6) デニスは夫人と共に、生後三六日の二卵性双生児を四二八日まで自宅の実験室で養育し、最少限度に社会的刺激を統制して、精神発達の様相と微笑の発現状態を観察し、その期間中、三種類の実験を試みた。社会的刺激の統制とは、三六日から一二日まで、養護日課は授乳、沐浴、下着のとりかえのための接触に限定し、子どもに微笑したり、話しかけたり、また子どもと遊ぶといった社会的接触を除外した。つい立で二児の寝台を区切り、以上の目的以外の時は子どもをひとり仰臥させておく。室内では実験者デニス夫妻は自由に話し合うが、子どもにむかつては話しかけないこととした。以上の生活条件の下で、微笑に関する実験がおこなわれた。実験は一日一回、授乳直後に (1)胸部を軽く愛撫する(三〇秒) (2)あごの下をくすぐる(一〇秒) (3)わき腹をくすぐる(一〇秒) (4)寝台の上、上体を屈げて顔を近づけ、子どもにはほえみかける。(三〇秒)その結果は四六回の微笑のうち三九回まで、寝台の上からほえみかける実験者に対して微笑をかえした。その他の刺激に対しての反応は不確実であったという。また人間の音声に対しては、子ど

もの上に笑顔を近づけ、話しかけない限りは微笑は浮ばなかった。二人の実験者は子どものいる室内で自由に話していても、その音声だけでは反応しなかったというのである。

以上のような特殊生活場面で、先天的遺伝的要因を統制した被験者をもってした実験の結果は、(1)乳児の微笑は人間の顔に対する視覚的反応である。(2)この年令段階では、人間の音声のみには反応しない。(3)口辺に与えた触觉的刺激によって生じる微笑は新生児期のおわり頃にみうけられるが、視覚的に人間対象をとらえることができるようになる、成人の顔が最も確定的な刺激条件となる。(以上は二人の双生児に同様な結果をみた。)

デニスの実験結果によって人間の音声のみが微笑を生起せしめるものでないことが強調され、多くの観察者の、先に音声に反応して微笑むという説は疑問視されるわけである。子どもにむかって音声が発せられる際、必然、視覚的に成人の顔はとらえられているからである。その後の観察者も等しく音声を統制して刺激を与えているなお、デニスは微笑は成人によってあたえられる、かすかずの不快からの解放に基く条件反応であるとむすんでいる。かくして、先に述べた三者とも、二か月以後の子どもの微笑反応は成人の「顔」である点で一致している。ビューラー、デニス、共に両者の視線の合致することを条件として付け加えている。かかる刺激因子である成人の

顔を更にゲシタルト学説の立場から実験にうつしたのが、アイノ・カイラである。(一九二八年)彼は成人の正面の顔を形成するゲシタルトと、その形態布置の崩壊する横顔を示して、それぞれに対する反応を観察しようとするのである。このような実験に関する乳児の反応の結果を次のように述べている。(1)三か月から六か月の乳児の微笑は特定の人にむけられるものではない。(2)実験者は必ずしも笑顔でなくてもよい。(3)両眼、ひたい、鼻、口で構成する正面の顔が反応生起の条件である。(4)、(3)のゲシタルトには動きを伴うこと。(註、乳児はその初期の発達段階において、静止するものより、動くものをよりよく知覚する。)

このようにカイラは情緒的要素を除外して実験を展開し、乳児の微笑は成人の親しみを帯びた笑顔に「反映する (Reflect)」というビューラー女史の情緒的要因を重視した説や、二か月以後の乳児は成人の顔を模倣するというウイーンのグエルンゼイ Guernsey, M. 女史の模倣説を反証することに成功している。カイラは六か月以後の子どもをも引きつづき観察して模倣が可能となるのは、はるかに後の発達段階においてであるという。ここに注意すべきことは、成人の情緒的表情を模倣するという説は反証されたにしても、それが同時に、子ども自身の微笑現象の情緒的性質や、社会的性質を反証したのではないということである。

カイラの実験は、その着想において、その実験方法において、き

わめて独創的で明確である。スピッツは、しかし、カイラの用いた被験児をただ一つの施設から得ていること。民族、国籍、文化的背景が同一であること。七一名の乳児を一週間、六名を二か月間観察したにすぎない点を不備とし、更に、カイラがゲシタルト学説に偏向して、発生的、発達的要因に注目することをおこなっている点も批判している。かくして、彼は民族的、文化的、環境的因子を考慮し、且つ発達の意義を重視しつつ、カイラのおこなった実験を骨子として、より広範な徹底した準備のもとに実験を展開している。

スピッツは乳児の微笑反応の普遍性を、白人、ニグロ、インディアン<sup>40</sup>の乳児を対象としてみようとし、次いで、微笑をおこさせる刺激条件の精密な実験を統計的に妥当な数において実施し、微笑反応の本質をきわめようとするともに、子どもの社会関係の発生と発達過程とを生後一年間の微笑現象の変化の中にとどろうとしている。スピッツの場合は、実験結果をフロイトの精神分析学理論の枠組で説明しようとした点に特徴がある。

以上、乳児期の微笑に関する今日までの実証的研究のあとをたどって見た。これをまとめると、二か月以後の乳児は成人の顔にむかって微笑すること（すべての観察者の一致するところ）、その刺激条件は成人の正面の顔を形成する視覚的ゲシタルトであり、（カイラ、スピッツ）それには生後一年の間に発達の変化の過程がみられること（スピッツ）。なお、この発達過程そのものに乳児と環境（人的環

境）との関係の成立過程をみることができる。（スピッツ）これら微笑反応発達パターンは民族、文化、環境の如何によらず、普遍的な現象である。（スピッツ）

さて、上掲の人々の示した研究成果に基づいて、乳児期の微笑反応そのものに注目し、その発達変化の様相を追求して、社会性の発達の問題を探ろうとおもう。

まず、私はカイラ、スピッツの実験方法を踏襲して、民族、文化、環境の諸点できわめて特有用なわが国の乳児を対象とし、微笑反応パターンの普遍性を検討してみよう。

次に母子関係の正常とみなされる家庭児とその関係成立の困難を予想される施設児とを実験して、両群間に微笑反応のパターンにおいて何らかの相違が見出されるかどうかを吟味してみよう。そして、その原因は何であるかを追求してみようとおもう。

更に、スピッツにならって、微笑反応の刺激分析をおこなってみよう。なお、独自の方法によって刺激条件を更にしたしかめてみたいとおもう。

#### (二) 微笑反応の発達パターンとその普遍性

##### (1) 実験の手つづき

(A) 被験児について、(昭和三〇年から現在まで継続しているが、ここには集注的におこなった二、〇〇名を整理して報告する)

表 2 微笑反応の実験に用いた被験児の環境分布

環境	年 令	0:0— 0:0+20	0:0+21— 0:2+0	0:2+1— 0:6+0	0:6+12 1:0+0	計
家庭児	gr. A.	2	6	27	12	47
	gr. B.	0	6	16	40	62
施設児	gr. C.	3	3	60	25	91
計		5	15	103	77	200

表 3 施設児と収容理由

群	収容理由		捨 児	生活 苦	離 婚	計
	母親疾病	母親死亡				
公 立 C <sub>1</sub>	結核・精 25 7	17	10	5	5	69
都 立 C <sub>2</sub>	4	1	3	4		12
私 立 C <sub>3</sub>	3		2	2	3	10
計	29 10	18	15	11	8	91

環境によって被験児を三群に分類した。まず、A群は中産階級、知的勤労者で夫婦単位の家族構成。B群は同じく中産階級に属すが、夫婦の他、夫の家族も同居している比較的多数家族、中小商店経営者がそのほとんどを占めている。C群は、公私立の施設群で三種の特徴のある施設を選んだ。(表2、3参照)

最初に、次のような一定の刺激を子どもに示し、その反応を記録し、シネフィルム並に写真におさめ、客観的考察の資料とする。また、この実験のほか、そのつど、精神発達検査(愛研式)をおこなう。

その方法としては、実験者は乳児の顔との間隔を約五〇糎にたもつ。子どもにむかって正面の顔で対し、肯くような動きを加える(次頁写真、刺激①)。音声と接触の刺激は与えない。この実験者の正面の顔に対して、子どもが微笑を浮かべたなら、ゆっくりと同じ動作をくりかえしながら横顔を示す(写真、刺激②)。反応が認められたなら、再び正面の顔にかえる。この他、片目をおおって同様の動作をくりかえす。(実験施行上の注意、子どものねむい時や空腹の時をさける。また、健康障害の時もさける。母親、保育者の同席をことわる。施設児に対しては、男女の実験者をもってあたる。)

### (3) 実験の結果

#### 微笑反応の発達パターン

以上の方法でおこなった被験児の反応は年令的に四つの範疇に区分できるような明らかな特徴を示している。もっとも、このように区分できるのは、横断の実験によるため、微笑反応の変化は漸進的過程であることは、いうまでもない。縦断的観察において、これは充分に観察できるのである。この点に留意しながら、次にここにあらわれた四区分の特徴をみることにする。(表4参照)



四か月児の反応

A 児 (施設)

出生日 1. 25. 1958 D.C.A. 4か月10日  
検査日 6. 5. 1958 D. Q. 115

刺激 1 正面の顔



刺激 2 横顔



刺激 3 片目



表 4 微笑反応の年齢分布状態 ( ) = %

被験児	年 令	0:0-	0:0+21	0:2+1	0:6+1	計
		0:0+20	0:2+0	0:6+0	1:0+0	
家庭児	Smile	0	4(33)	41(95.4)	12(23)	57
	No Smile	2	8(67)	2 (4.6)	40(77)	52
	計	2	12	43	52	109
施設児	Smile	0	0	59(98.3)	19(76)	78
	No Smile	3	3	1 (1.7)	6(24)	13
	計	3	3	60	25	91
計		5	15	103	77	200

「微笑」である。このような微笑は第二期(生後二日から二か月まで)に至っても例外的にしか現われない。この点はスピッツの場合も同様である。この段階にある二例は私の縦断的観察をおこなった家庭児S児とT児でスピッツにおける一例アドニアと共に、きわめて高い精神発達の水準を示している。(表5参照)この段階で微笑反応を生ずる前提条件は、(1)刺激が知覚できること、(2)反応がおこり

第一期、これは新生児期に相当する。(横断的な本実験は、極く少数に止めた。)この時期に一定の外的刺激に対して無反応であることは先に述べたとおりで、私が終始「微笑のような現象」と記述したように「真の微笑ではない。真の微笑と言われるものはビューラー女史やデニスが名付けたように「人間的刺激に反応する、社会的

得るだけの注意が集注できること。(3)反応を可能にするための神経筋肉協応作用が機能的に整備されていることなどが必要である。  
(註、スピッツの特殊例アドニアも高い知的水準の勤労者である父母の第一女で聡明で愛情深い母親に育てられている。)

第三期(二か月一六か月)においては、成人の正面の顔に対して環境差なく、ほとんどの子どもが微笑をもってこたえている。この段階は、刺激は特定の者の顔でなくともよい。男女の性差をとり

表 5

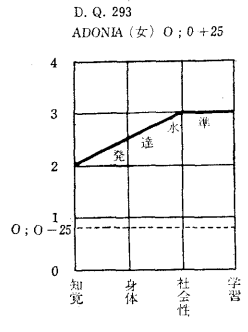
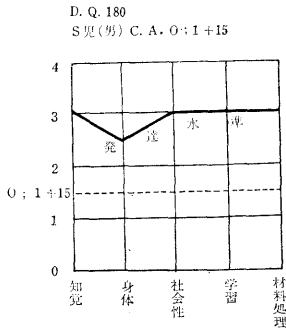
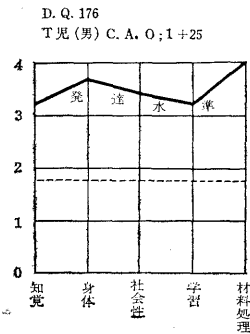


表 6 民族と微笑反応の比較 0:2+1-  
( )=% 0:6+0

民 族	白 人	ニグロ	インディアン	計	日本人	総 計
Smile	53(98)	26(96)	23(100)	102(98)	100(97)	202
No Smile	1(2)	1(4)	0	2(2)	3(3)	5
計	54	27	23	104	103	207

表 7 環境民族及び微笑反応の比較 0:2+1-  
0:6+0

環 境 反 応	施 設 児				家 庭 児			
	白 人	ニグロ	インディアン	日本人	白 人	インディアン	日本人	
Smile	53(98)	26(97)	23(100)	59(98.3)	14(93)	26(100)	41(95.4)	
No Smile	1(2)	1(3)	0	1(1.7)	1(7)	0	2(4.6)	
計	54	27	23	60	15	26	43	

表 8 微笑反応の年令分布, SPITZ との比較

年 令	0:0+20		0:0+21 0:2+0		0:2+1-0:6+0				0:6+1-1:0+0			
	全		全		家		施		全		家施	
環 境	S.	N.	S.	N.	S.	N.	S.	N.	N.	S.	N.	N.
実 験 者	S.	N.	S.	N.	S.	N.	S.	N.	N.	S.	N.	N.
Smile	0	0	1.5	33	96.5	95.4	98.3	98.3	3	49.5	23	76
No S.	100	100	98.5	67	3.5	4.6	1.7	1.7	97	50.5	77	24

S=SPITZ. N=NIWA. (%)

ない。この結果はスピッツの場合と、ほとんど一致している。(表8) 私どもの結果に三名の例外がある。これは前述のS児とT児で既に五か月に入ると刺激をあたえた実験者にいわゆる人みしりの反応をしめし、実験場面で微笑を生じなかった。施設児のほか一名は、同じく五か月児であるが、深刻な栄養失調をきたし、約二か月位の未熟児であった。(実験施行日は入院後一週間後で、精神分裂

る。しかし、彼らは見馴れた顔に対しては、親しみのこもった微笑でこたえることはいうまでもない。このような現象を「打解けなき」(故後藤昌男氏の用語)の時代として従来の観察者も認めているが、実験の結果、その反応のあらわれ方にも、その始期にも、きわめて顕著な個人差、環境差が見出された。特に環境差については、施設児における「人みしり」の始期の遅滞という点でスピッツ

病的母親に育てられていたが、母親が縛死したため入院した特殊例)  
この種の無差別的微笑が認められる年令段階は、ヘッツァ Hatzel、ウルフ Wolf、ゲゼル Gesell、A、デニス Dennis、ビローラー Bühler、C、及び我が国の愛育研究所の検査結果とも一致していて、民族、環境差なく、普遍的に、対象の如何にかかわらず、子どもは成人の正面の顔にむかって微笑する。(表6、7) 第四期(六か月—二か月)。六か月前後から、これまで誰に対しても無差別に現われていた微笑は消え、見知らぬ対象に対して、じっと、いぶかしげに、見つめるようになる。首を左右いずれかにむけて、相手の顔から視線をそらせる。近よると泣き出す者もい

のおこなった、白人、ニグロ、インディアンの子どもたちと対照的な差異を示している。(表8) 施設児においては、七六%の子どもが平均、九・五か月、おそい者で一・か月後半まで、無差別的微笑がつづいている。スピッツにおいては、家庭児、施設児を含めて、わずかに三%弱が無差別に微笑するにすぎない。

以上述べたところを要約すると、生後一年間の微笑パターンを対象との関連において、次の三段階にまとめることができよう。

第一段階、対象のない微笑→微笑の原型、生理的安静時の内部知覚による新生児の微笑

第二段階、対象無差別の微笑→民族、文化、環境の差別なく、普遍的に成人の正面の顔に微笑する。(二か月―六か月)

第三段階、対象選択的的微笑→正常な母子関係にある乳児は見馴れた顔と未知の顔とを弁別し、後者に対して、不安の表情を現わす。

(六か月以後)

さて右はスピッツの場合と施設児の反応において、差違するが、正常とみなされる母子関係の下では、人種・文化の別なく、微笑の普遍的パターンとすることができよう。次に私共は第二段階の微笑をおこす条件に焦点をあわせて、その性質を明らかにしてみようとおもう。

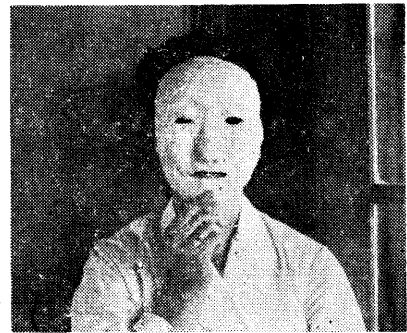
### (三) 微笑をおこす刺激は何か

先に述べたように、二か月以後の乳児にとって、彼らにむけられる成人の正面の顔は微笑をおこす刺激条件となるという点で、これまでの観察者は等しく一致していた。これはカイラやスピッツ及び丹羽のおこなった実験で横顔や片目のみを示した場合、常に否定的結果を得たことで確認されたわけであるが、カイラの言うように、人間の正面の顔を構成しているゲシタルトが微笑反応の刺激条件であるとすれば、あえて、人間の顔でなくてもよいはずである。スピッツはこの点を確かめるつもりで実験者自身が大きく口をひらき、両端を上部につりあげて、いわゆる恐ろしい顔の表情をしたものと、ほか二種のマスクをつけて実験にあたっている。スピッツはこれらの実験で、この年令段階の子どもが表情を認知できるかという点も付け加えて吟味しようとしたものである。私は、五種のマスクを用意して、その反応をしらべた。次員掲のマスクを一つ一つかぶって、背きの動作を伴いながら子どもに対すのである。微笑か浮かべば、横顔を示すことにした。このほか、子どもが情緒的関心をもつと思われる無生物、たとえば、哺乳ひん、布製人形(顔の直径一三釐大)及び母親の顔を布でおおって乳房のみを示してみた。以上の実験のほか、正面の顔に対して微笑が頂点に達したとき、実験者に合図して、「横目をつかっ」視線だけを、子どもからはみせせず実験を加えた。マスクに対する結果は表りにあるとおりである。(写真参照) これによると、マスク(一)に対して九六・七%、(二)に対

マスク 一



マスク 二



マスク 三



マスク 四



マスク 五



して、九二%、(三)に対して九八・四%、(四)に対して、九五%、(五)に対して、六四名中、五七名、八九%が否定的反応を示した。(四)における七名の肯定的反応者のうち、家庭児も施設児も、ともに、六か月に達したばかりの者たちであった。これは、六か月頃になると、(四)のおたふく面の表情を、他と弁別し得る能力に達していたものと考えられようか。

無生物に対しては、いずれも否定的で、母親の乳房も、口をちかづける、手で愛撫する、という反応は示した

表 9 各種のマスクに対する反応

月令	刺激環境 反 応	M <sub>1</sub>			M <sub>2</sub>			M <sub>3</sub>			M <sub>4</sub>			M <sub>5</sub>		
		家	施	計	家	施	計	家	施	計	家	施	計	家	施	計
0:2+1	Smile	2	0	2	5	0	5	1	0	1	3	0	3	4	3	7
	No Smile	22	40	62	18	37	55	22	40	62	21	40	61	20	37	57
0:6+0	計	24	40	64	23	37	60	23	40	63	24	40	64	24	40	64
0:6+1	Smile	1	1	2	0	1	1	0	1	1	0	1	1	3	3	6
	No Smile	23	21	44	24	21	45	24	21	45	24	21	45	21	18	39
1:0+0	計	24	22	46	24	22	46	24	22	46	24	22	46	24	21	45

R子(施設) 三か月児 IQ 102

正  
面  
(男)



正  
面  
(女)



が、微笑は生じなかった。正面の顔を示しながら、視線だけ相手からそらす実験は、一名の例外なく、微笑はかき消された。



マ  
ス  
ク  
一  
四



マ  
ス  
ク  
五



マ  
ス  
ク  
一



マ  
ス  
ク  
二



マ  
ス  
ク  
三

#### ④微笑反応の発達パターンと対象関係

以上の結果を考察すると、次のような結論に到達する。すなわち、第二段階の年齢に相当する子どもは、人間の正面の顔を構成する視覚的刺激に対して微笑し、その刺激条件は、両眼、鼻、顔、眉、口からなるゲシタルトであつて、両者の視線が結びつくことを必須の条件とする。それゆゑ、視線の結び合わないマスクに対しては本年令段階では肯定的反応がおこらない。六か月に到達した子どもが(Ⅱ)のおたふく面に反応を示したのは、既に、わらひの表情の弁別能力が可能な段階に至つたことを示すものと考えられる。このようなゲシタルト知覚は、言うまでもなく、二か月以前の段階では不可能であつた。デニスも言うように、乳児の側の空腹とか、おしめのごれとか、そのほか、数々の要求を充たすために近よつて来て、示されるのは成人の正面の顔である。この顔は生理的緊張と、それが解放される際に結びつき、一方では乳児の成熟と相伴つて、記憶痕跡にきざみ込まれてゆくうちに条件反応の学習過程を通じて、この顔のゲシタルトを示され、視線が結びつきえすれば、生理的要求やその充足にかかわりなく、微笑が生じるようになる。子どもの要求充足のために奉仕するのは主として、母親である。しかし、この年齢段階では「母親」という特定の「顔」の視覚像はでき上つていない。けれども、徐々に、母親の顔は特殊化されてゆく。私どもは母親の腕に抱かれて、その乳をのんでいる乳児が、まばた

きもしないで母親の顔を見あげている情景をよくみかける。三、四か月も過ぎる頃になると、充分に満足した赤ん坊はよく乳首を口から離し、母親の顔を見上げ、喃語するものである。私共の調査の結果では、夫婦単位の家族構成で、外部からの刺激が比較的少ない子どもたちの方が、多枚家族や、施設児より、「人みしり」の現象がはやく現われていた。特に施設児は無差別的微笑が長くつづいていゝ。施設においては特定の対象の顔か記憶にきざまれることはむづかしい事情にある。授乳も一人ひとりを抱いてあたえるわけにはいかない。むしろ、与えられた哺乳びんから、ひとりで飲まされていゝ。沐浴と下着の交換の時が唯一の接触の機会であろう。その上、養護者も絶えずかわるわけで、対象との結びつきの機会はきわめて少ない。以上のような諸条件が施設児の選択的微笑を遅滞させる原因であると考えられる。

無差別的微笑の停止の事実(第三段階)は乳児の社会関係の正常性を物語る指標である。この関係は、後の社会関係の基本であり、またその社会関係の型を決定するものである。

微笑反応の発達を継続的に観察すると、かかる反応の底に横たわる情動は、成人における快の感情と同質のものであることが認められる。選択的微笑反応の出現は、子どもが肯定的情動を見分け、経験する能力が備わつたことを示すものである。したがつて、このような微笑反応が発達の途上で、前述の期間に現われないこと、また

は、はなはだしく遅滞することは、そのこと自体が問題を含む徴候のサインではあるまいかと疑われる。それ故、私どもは次に、第三段階に更に注目して、対象無差別的微笑と同時に現われる不安現象を実験的に観察してみようとおもう。

## 五、消極的情動の発達と社会関係

### (一)、「人みしり」の現象と不安

まず私は家庭児群と施設児群とに、種々な状況を設定し、刺激を投与して、その反応を観察した。そのあらまは次の表10、11の通りである。

これらの結果は、見馴れた顔と未知の顔との弁別能力が備わったことを示し、また、特に設けられた場面における子どもの諸反応は不安の表出とみなされるであろう。

先に、微笑の発達過程をみてきたのでこれと対照的に消極的情動の発達変化の過程を次に考察し、よって不安情動の意味を吟味しようとおもう。

### (二) 消極的情動の発達過程と対象関係の成立

第一段階、新生児期の観察を記述した際に、誕生当時、嬰兒の泣くことは、生理的緊張の未分化な放出現象であり、不快の表出であ

ることを認めた<sup>19)</sup>。スピッツは生後五、六週におよぶ一時期が不安情動の発達の最初の段階であると言っているがこの時期の不快の表出は本来の意味における不安の表現とははるかに、かけ離れたものである。ブリッジス Bridges<sup>20)</sup> が生後三週間位から発生する困わく<sup>20)</sup>の情動と見たのがこの段階を代表する生理的緊張状態、不快表出と符合するものであろう。

第二段階に至ると、緊張状態は次第に規則性を帯びるようになる。そして、この状態は常に特殊化された不快な事態に表出するようになる。周囲の者は、この表出によって、子どもの空腹や、からだの痛みなどを区別し、理解するに至る。その結果、人々は子どもから告示される要求に、多少とも一貫した仕方では反応するようになる。子どもは、今や、随意に要求を満足させてもらうため、シグナル(泣くこと)をおくることができる。このようにして方向づけられた動作によって、環境を支配することができ、自らを不快なものから解放し、望むものをもたらすことができるようになった。およそ三か月頃から、子どもの精神生活に記憶痕跡が徐々に増加してゆく。この時期に微笑反応が、学習過程で獲得されたと同様に、以上のべたところの不快からの解放も学習されてゆく。

また、不快な経験をもたらす人間や事物に対して恐怖反応をおこす。恐怖は意識上の記憶に関連しておこるのである。(医師の白衣に対する反応など)



表 10 家庭児における“人みしり”の実験

刺激 反応 場面	1m の間隔で対する	人数	50cm の間隔に縮める	人数	子どもの名前を呼んで、両手を差し出す。次からだにふれる。	人数	
母親に抱かれてい る親の傍に母 乳を母車に入 る母乳を母車に入 る母乳を母車に入 る母乳を母車に入 る母乳を母車に入	1	みつめているが平静。微笑はしない。	20	みつめているが平静。微笑は生じない。母親によりそう。時々母親の方に視線を移す。母親にしっかり抱きつき時々しか客を見ない。	15 3 2	片手を母親の肩胸にかけ、表情が固くなる。泣き出しそうになるが、泣かない。泣く。	10 11 9
	2	じつと客をみつめる。平静。注意は集中している。	20	目立って表情が固くなる。	20	母親の顔をふりかえって見る。客からは背を向けることとなる。	20
	3	注視。否定的。	20	おびえの表情。泣かない。明瞭に否定的感情。	20	泣き出す。はげしく泣く。	20
	4	不安の表情をたたえて注視。	20	泣き出す。	20	より一層はげしく泣く。(涙を出して泣く)	3
	5	母親の去った出口を見て客の顔に視線を移す。じつと客の顔をみつめる。	15 5	泣き顔になる。	20	泣きはじめる。だんだんはげしく泣く。	20
☆ 刺激変化 はげしく泣く最中に、実験者は子どもに背を向ける							
		そのまま、しばらく泣いている。	8				
		徐々に泣き声が弱まる。	12				
		泣き顔のまま、客の背をみつめている。	20				

表 11 施設児における“人みしり”の実験

刺激 場面	1m 以上の間隔で近づく	人数	クリップに近く接近する(手の届く位)	人数	もつと近づく	人数	実験者は手を出して子どもを抱き上げる。	人数
クリップの中にいる。	1	まじまじと見つめる。笑顔はあらわれない。	20	泣き顔になる。	11	泣き出す。口の両端を下げて下を見る。	泣くことを止めてじつと客に抱かれている。胸に手をあてたり、客を眺めたりする微笑は生じない。	11 9
	2	じつとみている。	20	だんだん下を向いて、終にうつ伏せる。横を向く。緊張して来る。	11 9	泣き出す。	他所に視線を移す。口の両端が少し下がる。表情は明らかに泣き顔。声を出して泣かない。	11 20 9
保育者がいる保育床の上クリップの外にいる保育者もいる場合	3	無関心。	20	保育者にすがって実験者を眺めている。笑い顔なし。	20	片手を出しかけてひっこめる。素直に抱かれる。不快な表情(泣かない)抱かれたままで実験者の顔を見ている。	3 20 11 9	

第三段階に至ると、不安が六か月から八か月頃に出現する。私の観察では、家庭児に対して施設児はおどろくべき遅滞を示したが、正面から近づいてくる人間に、忌避や後退の態度を示す。これは恐怖に類似するが、恐怖反応ではない。子どもは以前に何らの不快の経験をこの未知の人に対してもったことはないからである。これは何によっておこるのであるか。先に述べた微笑反応の刺激分析と人みしりとの実験結果から、乳児における顔の識別は認識の最初のもので、それは母親との間の情動関係によって発達し、「顔」の識別がその後の発達の進路を切り開き、拒否的情動も、この識別に関与することを見出した。

第三段階で現われた不安に関しては、次のように解釈できるであろう。子どもは母親の顔の記憶と、それによって導かれ、備わった弁別力で未知の人に対決するわけであるが、それが母親の顔でないことを発見するとき、母親に置き去られた時と同様の不安を経験する。しかも、人みしりの最中に未知の人がくると子どもに背をむけると、子どもは泣き止み、しばらくしてその背に近づいて、時にはその上衣にふれることもある。(表10) このような反応は、母親と未知の人の顔に対する記憶が薄らぎ、不安感も薄らいだためとみなされよう。いわばこの第三段階は、微笑が見馴れた対象に選択的にあらわれたように、不安が未知の顔の弁別から生じる。これらの事情を通じて、私共は乳児とその特定の対象との関係は、乳児期の

後半において成立することを認めるのである。

したがって、この時期における施設児の対象弁別のおくれは、施設における特定の対象との関係成立の失敗、または困難性に起因する。人を認めて微笑を始めた三か月頃から、施設児は人の存在に殊更敏感である。家庭児にくらべて、施設児は目立って人なつこいというのは、観察者の等しく一致するところであるが(ゲゼル、デニス、スピッツその他)これは彼らが人との接触の機会に恵まれなからに他ならない。彼らは特定の保母との間に関係をもつことはきわめて困難な事情の下にある。子どもは欲するだけの愛撫を受けず、語りかけてもらう機会も少ない。愛情に枯渇した状態がそのまま改善されずに継続する場合、子どもは単に社会性の面で欠けるだけでなく、おそるべき精神発達の遅滞や、きわめて深刻な異常性の発生を示し、小児精神病様の症状を呈する(ホールビー、スピッツ、丹羽<sup>(29)</sup>日本心理学会第二六回、精神分析学会三十七年度報告)。

以上、子どもは消極的情動の発達、特に不安現象に注目して、それが乳児の対象関係成立上どのような意味をもつか、また、不安の現われる第三段階に施設児の人みしりの現象のおくれるのは何に起因するかを考察した。

## 六、対象関係成立のパターン

誕生以後一か年にわたる乳児期の社会関係の発生と発達とをたずねて、私どもは乳児とその時期にすべての環境因子を代表する母親を対象とする、両者間の関係成立の歴史に注目し、それを情動生起の現われを通じてみてきたわけである。それは未分化性と無援性で特徴づけられる新生児期、無差別ながら人間対象を認知しはじめたことを示す。「三か月の微笑」の時期、および、対象選択的微笑ならびに不安情動の現われをもって特定の対象との関係成立を告げる「八か月の不安」の時期が重要な臨界点として記録され、以上が乳児期における正常な社会的発達のシクエンスであることを見出したのである。

最後に、対象関係成立後の乳児の精神発達、特に社会性の発達の様相を、乳児期の終りまでたどってみる必要がある。私はこれを継続的観察をおこなったS児の場合を顧みながら考察してみよう。生後六か月までに乳児の社会的発達は目立って緩慢であった。その一つの理由は、乳児の無力にある。彼は周囲からの援助をまたなければならぬ受動的な存在であった。しかし六か月を過ぎると、このような状態に甘んじなくなる。それまでに子どもの知覚、運動能力、記憶などはかなり発達して、弁別能力も備わってきている。対象関係の成立を境として情動・社会関係・及び精神発達の全領域にわたって、発達のテンホは急速となる。情動の現れは、更に細かなニュアンスを帯びてくる。一〇か月から一二か月に至る頃には、

不快・不安・失望・嫉妬など、他面、ホメオスタシスの状態から快の感情、ある特定の者への愛情・同情・社会的あそび・玩具を楽しむこと、所有の感情など、多岐にわたる情動が分化してくる。これは前段階の関係よりも、はるかに複雑になった人間関係の発達の内に見出されるのである。私どもはここで、同一視の発達に眼を転じなければならぬ。同一視の痕跡は、三、四か月頃、断片的模倣の形式にみうけられた。これはちょうど、微笑反応のおこり始めた時期で、ピアジェは乳児の微笑も模倣の範疇に入れて説明しているが、これは擬似模倣ともいべきもので、真の模倣は、八か月から一〇か月に、子どもがその対象、母との関係が確立した後にはあらわれる。S児における模倣、あるいは同一化はおおむね、母親がその子どもに供給する情動的性質の影響によるもので、彼女の意識的、無意識的な情動的心情は、そのまま子どもの動作・表情・音声（抑揚）となって模倣の対象となっている。スヒッツも言うように、模倣の機能は知覚されたものの一つの反映ではなくて、それによって、自我変化を生起させるところの無意識的な情動的関係が加工されたものである。母親の表情の模倣のほか、動作の模倣は、子どもを母親から独立的にすることであるというスヒッツの考えは適切である。かつては肉体的にも一体であり、出生して分身したとは言え、無援の存在であった子どもは、母親に全的に依存している。同時に、母親にとって、子どもは明らかに彼女自身の一部である。子ども

もの側に、徐々に知覚器官が整備し、運動能力が発達し、移動と上肢の機能が可能になるにしたがって、子どもは自由を獲得するようになる。しかも、自由の確保の率に比例して、子どもは対象関係の形成にむかう。この対象関係の確立は、子どもが一個の、独立体として、対象たる存在に關係をもつということにほかならない。子どもは母親の動作を模倣することによって、その自律性を増し加えていく。しかもこのような同一化作用は、意図的に母親が、一つの動作を教示しようとしてとった行動というよりも、母性的な、やさしい情動的風土が模倣という機能を通じて、子どもに作用するものとみるべきであろう。S児における、ゆたかな表情、自然に体

得された動作、顕著な知的発達などは満足な母子の情動關係の土台の上に着々とつまれた学習の結果にほかならない。S児においてはその生活のはじめから、不当に不快をあらわす泣き声をきかなかつた。彼の日々の生活は、新生児の当初から、ある快よい律動の波に乗ったもののような規則性がみうけられた。かくして、この一年の間に全的な成熟と発達とのあとが刻明にきざまれ、今や満一年を経て独立した人格が（それはいまだ、はじまったばかりの独立性ではあるが）母親のゆたかな愛情と知性とに守られ、知らず知らずのうち相互に影響しあいながら、新しく装備された運動能力と言語という武器をもって、第二年をより積極的に人間仲間との交わりを開始することであろう。

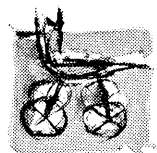
乳児期における社会性の希ましい発達をたすけるものは、終始、子どもの直接的環境である母親の存在であり、その安定した情動生活と円満な肯定的人間観に貫ぬかれた知性であると言えよう。乳児において、社会關係は情動をもって実現する。満一年間の社会性の発達の基盤がこの母子關係から出発すると結論してさしつかえないであろう。

母子關係の破綻、不成立による乳児期の愛情欠乏の場合は稿をあらためて記述するつもりであるがここに、施設における保育者並びに管理者の方々に留意していただきたい一、二の点を付記しておく。まず保育にあたる人々はでき得る限り子どもとの接触を保つよう積極的に努力してほしい。六か月以後は殊に折あるごとにやさしく語りかけること。管理者の方々には、乳児期の子どもの保育担当者には殊に情緒の安定度の高い人を配置し、人員配置の変更をできるだけ避けてほしい。また保育者の精神衛生管理に積極的に努力してもらいたい。以上は施設の物理的・衛生的管理と共に、否、それにも優って、乳児の成長と精神発達並に人格形成に不可欠な条件であるからである。

（東洋英和女学院短期大学）

- 1) @Preyer, W. (1888) *The mind of the Child*. pt I. The Senses and the Will. (Trans. by H. W. Brown) New York, Appleton
- ⑤Shinn M. W. (1893—1899) Notes on the Development of a Child. Nativ. Calif. Publ.
- ⑥Darwin, C., "A Biographical Sketch of an Infant," in Munb (1877)
- ⑦石川貞吉「生後一年間における児童発達の観察」児童書院 1914
- 2) @Terman, L. M. & M. A. Merrill, (1937) *Measuring Intelligence*. Boston: Houghton Mifflin.
- ⑧Bühler, Ch., (1927) *The Social Behavior of Children in A Handbook of Child Psychology*. ed. by C. Murchison. Worcester, Mass.
- ⑨Gesell, A., & Amatruda, C. S. (1941) *Developmental Diagnosis* New York, Hoeber.
- @牛嶋, 木田, 森脇, 久浪: 乳幼児精神発達検査, 児童研究叢書Ⅱ, 昭24. 6. 1. 金子書房
- 3) Washburn, K. M. (1929) *A Study of the Smiling and laughing of in fans in the First Year of Life*. Genet. Psychol. Monog.,
- 4) Bühler, Ch. 前出 2) ⑤
- 5) 前出 2) ⑤
- 6) Demms, W., (1935) "An experimental test of two theories of social smiling in Infants" *J. Soc. Psychol.*
- 7) Kalla, Erno, (1932) *Die Reaktionen des Säuglings auf das menschliche Gesicht*. Ann. Uni. Abocensis.
- 8) 前出, 2) ⑤
- 9) Guernsey, M. (1928) "Eine genetische Studie über Nachahmung." *Zeit. f. Psychol.*,
- 10) Spitz, R. A., (1946) "The Smiling Response." *Genet. Psychol. Monog.*
- 11) Spitz, R. A. 前出 10.
- 12) Hetzer & Wolf, K. Baby Tests (1929) *Zeit. f. Psychol.*,
- 13) Gesell, A., (1928) "The Mental Growth of the Preschool Child" in Infancy and Human Growth.
- 14) Dennis, W. 前出 6.
- 15) Bühler, Ch. 前出 2. ⑤
- 16) 愛育研究所編, 乳幼児精神発達検査, 前出
- 17) 後藤岩男, (昭24)「社会的行動の発達」, 児童と社会生活 児童心理叢書 金子書房
- 18) 丹羽淑子①「乳児の微笑反応に関する研究」日本心理学会第22回発表  
①「乳児における不安情動の研究」日本心理学会25回  
②「乳児期における対象関係の発生と発達の研究」精神分析研究 Vol. VIII No. 2. 1961
- 19) Spitz, R. A., (1957) *Die Entstehung der Ersten Objektbeziehungen*, Klett, Stuttgart.
- 20) Bridges, K. M. B., (1932) "Emotional development in early Infancy," in Child Development.
- 21) Bowlby, J. (1935) *Maternal Care and Mental Health*, WHO Monograph Series No. 2. (日本語訳, 乳幼児の精神衛生, 黒田実郎)
- 22) @Spitz, R. A., (1950) "Anxiety in Infancy," *Int. J. of Psychoanalysis*
- ④ \_\_\_\_\_, "Anaclitic Depression," (1946) Psychoan. Study of the Child, Jf. New York, Int. Univ. Press.
- ⑤ \_\_\_\_\_, (1951) "A Note on the Extrapolation of Ethological Findings," *J. Psychoan.* XXXII.
- ⑥ \_\_\_\_\_, (1945) "Hospitalism" *The Psychoan. Study of the Child*, Vol.1. 丹羽淑子 (1962) 「施設乳幼児の情慮の偏向に関する特発例について」第26回 日本心理学会発表
- 24) Piaget, J., 1956 *La Construction du Reel*, Paris Newchatel.
- 25) Spitz, R. A., (1957) *No and Yes. On the genesis of human Communication*. Int. Univ. Press.

## 倉橋賞を受賞して



井 桁 佐 以 子

日ごとに成長する幼い生命をみつめつつ、その成長を追って、私たちの研究は曲りなりにも一日一日と続けてきたのでしたが本当に思いがけず倉橋賞をいただき、言い尽せないほどの喜びでございます。

この一年の私たちの研究は、三歳児という、ごく限られた範囲の小さな研究でありますが三歳児の姿をとらえるための第一歩として始めました。しかし、いざ始めてみますと、保育しながら観察記録をとったり写真を撮ったりすることがむずかしいことであり、多くの配慮と根気があることを改めて知らされました。またその観察方法や

記録のしかたなどについては、あらかじめ打合せて始めたことでしたが、始めてみますと更に細かい点についてさまさまの疑問がわき、その都度、話し合いを重ね、互いに意見を訂正し合いつつ進めていったのです。園での月ごとの研究の前日には、そのまとめで、すっかり日暮れてあわてて帰ったことも何度かあったことが今、思い出されます。もっと下準備をして臨んだら、このように研究の方針や、まとめに手間どらなかつたのではないかと思いましたが、たいへん、もたつた研究の進め方でありましたが一方私たちは、この、一つ

の小さな遊びの観察から子どもの成長を見、成長のはげしい幼児と接することのむずかしさと重大さを一層深く感じたのでした。

“しないよりはよい”と自分自身をほげましつつ、一年統けて学会にのぞんだ私たちにとって、これがむだな努力でなかつたことを知らされ、私たちはどんなに励まして、広範囲にわたる研究発表に接し、また長年にわたり研究に、保育に情熱をそそいでいる方たちの姿に深く感動させられました。

保育の道は、幼児の心をつめ育くむものである故に、また幼児の問題は単にそこに止まらず家庭や社会の問題に深くつらなるものである故に、私たちは、この中の広い仕ごとの、困難な壁に直面しては自信を失うこともしばしばですが愛情をもって今後とも努力し、幼児の心身を強く豊かに育てよう努めたいと思います。(愛育幼稚園)

# 四十年の歩み

結城光雄



私が大正六年に日本聖公会の教職養成機関であった東京聖三一神学校を卒業して、八戸聖公会に赴任ときました時、友人の一人が私に「君は幼稚園の園長さんも兼ねることになるんだね、どうだい用意があるのか」と聞かれて、寝耳に水の思いをさせられたことが思い出されます。そうだ私はそういうこともあるという心構えを前もっておって、教育技術を身につけるまでにはいかないとしても、少しは幼稚園教育に関する書籍に眼を通し、機会を作って都内の有名幼稚園の參觀ぐらいはしておくべきであった。したらこの期に及んでこんなにみじめなうろたえ方もせずにすんだものをと、いまさら自分の迂闊さが悔まれたのであります。

対外関係や経営面を担当し、保育の実際にふれずにすんでおりました。八戸在住二年半で私は福島県の平聖公会に転任いたしました。ここにも湯本の方に附属の幼稚園がありました、ここには英国からの婦人宣教師でロンドン大学を首席で卒業し、懇望されて我が国の学習院女子部がまだ華族女学校と称した頃の教師となって来日した婦人が、契約満期と共に我から進んで婦人宣教師となったという傑物があり、その人が団長で、私はそのワキ役として主事兼チャプレンというような名目で、将来是が非でも園長としての責任をもたねばならないからとて、何やかや雑務をおしつけられ、ここでも主として経営面の仕事や対外関係の仕事进行处理するが私の役目でありました。そしてこれも在住二年半で、大正十一年七月、日立に転任、今度は名実共に園長として

の責任をもたねばならぬこととなりました。こうなることは最初から分かりきった事でありましたが、まだ園長となる心構えができずにその座にすわってしまったのであります。こんな事ならこれまでの五年の間に、もつと繁々と幼稚園に顔を出し、見様見真似でもよいから実際の保育の面にもふれておけばよかったのにと思いましたが、時既に遅しで遮二無二その場に立たせられる事になってしまったのであります。

それからの私は名実共に幼稚園長になりたいたいと思ひまして暇があると先ず園児の中にまじって遊びました。その頃の私にできることは園児にまじってただ遊ぶことと、聖書のお話しをしてやることだけでありました。努めて児童心理に関する書を読み、保育の実際の指導書とも首引きをしました。が、余りに得たところがあつたと思われませんでした。しかし何のテクニクももたず、注文もつけずにむき出しのまま幼児と共に遊んでおる中に、それは私にとつて何とも言えない喜びである事を知りました。子どもと一しよになら飛びますればままだとも致します。今ではそうはゆかなくなりましたが七、八年前までは新入園児の名を一番早く一番早く知ることのできたのは、若い先生たちではなく私でした。良寛和尚ではないが子どもと一しよに遊べることが何よりの楽しみであり、それだけで幼稚

園長になれた事を今は無上の幸福と感ずるようになりました。よく人から言われるのですが、先生はお若いと。半分はお世辞としても、もし本当に若いところがあるとすれば、それは毎日園児と一しょに過せる賜ものであると思います。

それに幸いな事には園内においての人の和も先ず上々でただ一度いやな思いをしたことがあっただけで四十年を過ぎてきたことです。戦後戦災のために焼けてしまった幼稚園の再建の事で動きはじめると、是非私の地区で私の地区でと殆んど同時に二カ所から二葉幼稚園の再建を求められて、一方は焼け残った会社のクラブを、一方はその地区の公会堂をお母さんたちが借り受けて私の幼稚園として発足させてほしいとの申入れを受け、いずれも断りかねて一時に二カ所の幼稚園の経営に当たることになりました。その中の一カ所は数年間幼稚園として存続しましたが、後に所在地の環境から保育所になることになりましたので、それを機会に私は手を引くことに致しました。

ところがこうした折角責任の一半がまぬがれたと思っておりましたとたん、今度は教育畑出身の婦人の市会議員さんから、市では今幼稚園の必要を痛感しておるのでありますから一つあなたの幼稚園を四、五カ所に作ってもらえないか、もしそのつもりがあるなら発

足に至るまでのお膳立は私たちがしようとのことで、二、三の候補地まで挙げての感謝すべきお勧めを受けまして、そのような氣勢にあおられてトントントン拍子に土地建物が与えられてできたのが、今の分園の生い立ちであります。

こうして前後四十五年にわたる私と幼稚園との関係ができ、始めは多少迷惑にも感じておりましたが、後には私のもっとも生き甲斐のある仕事となり、今もって教育技術は身につけてきたとは申しかねますが、童心にかえて幼児とただ遊ぶことに喜びを見出し、そこに園長としての一つのあり方を見出して

おるものであります。偶感

○ある時は細くかすかにある時はまたく強く  
守り来し道

○禿頭園長先生禿頭とリズムに乗せて歌い来る子ら

○弾丸の如く飛び来てお早うと笑いはころばす円き顔の子

○悪たれもその愛情の表現に用いてケロリと  
屈托もなき

○百人に百色の愛を分けもちて心と言ふは奇しきものかな

(茨城県・二葉幼稚園長)

## 西元茂子



「光陰矢の如し」とか。過去四十年を回顧すればその速やかさに驚くのみ。

四十年といえども小学校に教鞭をとること八年、幼稚園に三十二年、若い血潮に燃えてまっしぐらにいそしんだ昔が一入なつかしく偲ばれる今日、気分は若くとも身体の活動の点は如何とも比すべきにあらず、何時までも若くていたい心でいっぱいである。

四十年前には夢にすら想像できなかった文化、科学の進歩の著しき。小学校低学年を担当する頃、今の時代のように便利な教具の販売もなく、自分自身で考案し各児童に与え、またポイント式のものを作製し、公開を勧められ、その効果を認められた。また、低能児グループを組織して能力程度に応じた指導をし、あの時代には新しい試みだと県視学より



賞せられたことも楽しい思い出である。

この学校は体育に特長をもち、県下切つて一番に女児の体操服、男児は黒筋入りのパンツで異彩を放ったが、これらは女教師が放課後、また日曜日も返上で全校児童のを仕立てたものである。当時は女教師は着物に袴という服装であった。児童が体操服であるのに先生が着物ではというのが女教師も体操服を作り、トップを切ったので県下教育界の話題となった。相和して団結する妙味は格段であった。当時と現代の世相の変化に驚異する（大正十三年）。

昭和五年幼稚園保母となる。

ここ美哉幼稚園創立一年後で当時幼稚園に入園する園児は特殊な家庭で園児も僅か二十名を数える程であった。私と他に一人の先生と二人で、保育内容はお遊戯に積木、折紙、ぬりえ、おままごと、童話程度であった。積木といつても小箱入で赤黄緑藍など着色し組立模型図によつて静かに模型図通りに積み重ねる程度で何をするにも画的であった。或る時皆の積木をいっしょにして何でもよいかから作つてごらんとしようと、急に活気づき燈台に行く道た、この長い道が一番角だ、こりから二番角、今度は三番角た、三番角の一番先きに燈台を立てるのと大根一本（買つていた大根を見つけて）、丸いしっぽの方を上にして燈台ができた。海に舟だと積木を重

ねたり折紙で舟を折つたりお魚に木の葉を浮かべて大よろこび、リーダーであつた俊郎君の顔が浮かぶ（昭和七年）。

その頃県・市の何処に幼稚園があるのかも知らず、ただ単に孤立状態で黙々と我が仕事のみ忠実であつた。昭和十一年頃米子市に私幼二園、保育園二園、現在境港市（当時境町）に私幼二園、保育園一園計七園が相集り、語り合ひ、遊戯の交換会などをすることが発足した。

その頃人形芝居の紹介があり、物珍らしく早速夏休み中に作製にかかり誕生会の時には人形芝居を見るのを唯一の楽しみに待つのであつた。平穩な年が続いていたが昭和十二年日支事変が起つたが、国内はさしたる事もなく昭和十五年は建國二六〇〇年の式典が盛大に行なわれ、幼児達も旅行列をよるこんだ。

翌昭和十六年十二月八日は大東亜戦争が勃発し、年々戦火が砦になるにしたがつて、落ちつけない日々が迫つた。本土空襲ともなれば覆せ、退避の訓練を日課とし、空襲警報が鳴りびびくと何はさておいても地区別に家庭へ速やかに送り届け、途中で事故なき事を念じつつ心臓の鼓動を高めた。二十年四月二十三日、ここ境港市には、あかつき部隊の火薬庫があり、積荷の火薬を運搬中、引火爆発、我家、幼稚園、本堂共外郭だけは残つたもの

の硝子戸は全壊、柱は折れる箇所もあり、天井、壁土は、落ち、瓦は飛び、雨ともなれば大きき状態、園児宅遭難者多く散りぢりに避難され休園状態となる。日増しに国土空襲は烈しく当市は危険状態となり、疎開勧告を受け具体的に話を進行中八月十五日の終戦を迎えた。破壊された園舎は資材不足のため充分の修理もできず、明るかつた園舎はみじめな姿となり、一時を凌いで開園の運びとなつたのが十一月、物価値上り、物資はなく、食うにも食えないようなものばかり、雑草の粉末、畠の隅に捨ててゐるような親指大のさつまいも、キューバ砂糖などの配給には発育盛りの子どもは胃腸をそこねる。二度とあんな世の繰り返しをしないことを心の底の底から念じる。

無理に無理を重ねたせいか二十一年十一月遂に病魔におかされ床づく身となつた。床づいていても気がでない。三月ともなれば卒園児を送る準備、新入児を迎える準備も進めなければならぬ。全快とまで行かなくともほつぽつ動かれそうになつた。

日本国内は米國マッカーサーの支配下におかれ有為転変の世となつた。教育方針は全く変り、スタートを切り換えて再出発、教員の資質向上が叫ばれ認定講習会が開かれ単位取得に懸命になつた。PTA指導者講習会も開かれた。

幼稚園設置基準が示されなかなかの重荷を負わされるようになったが一步一歩前進し、基準に近づくべく努力しつつある事は子ども達の為に幸せ至極である。

二十四年には教育の一元化が叫ばれ教育の出発は幼稚園から大学までと、幼稚園の存在が認められるようになり、先生の資格も保母と呼ばれていたのが教諭となり、幼稚園関係者はその飛躍に喜びを感じると共に大いに白重する時機が来た。

昭和二十八年度は全国的に入園者激増し、当園も増築改築の一步を辿った(創立二十五周年)。

昭和三十三年一教室増築(お母さん達の絶大な努力があつて)

近年幼児教育の重要性か一般社会の方々に認識され、一年保育よりも二年保育の価値を評価される傾向の高まつてきたことは、幼児教育の真価を認められる時機が来たのだと喜びにたえない。

昭和二十五、六年頃は現在のように衛生思想は普及されな時代、S子、K子さんの顔色は悪く、リズムに乗らず、活力のない態度が気になり、ツベルクリン反応の結果、何回も20K離れた保健所に引率し早期に発見出来て、家庭に連絡し三ヶ月休養治療に努めたところ見違える健康児となり再登園、母子家族の安堵と歓喜、感謝のさまは今もお嬉しい思い

出。身体の発達を助長する遊具はいろいろ備えられ、視聴覚教育は進み、自主性創作力の進んだ事を嬉しく思う。

振り返って見るに以前の子どもは一般に依頼心強く何事をするにも助力を求めの者が普通であつた。それに比してこの頃の子どものようすを例挙すれば(自然物を用いて)、年少組の子ども達 砂場の丸いふるいに砂を盛り、おくれざきのおしろい花、サルビヤ、早咲きの山茶花の花を調和よく盛り合せ、先生、おいしいケーキです、食べてちょうだいと持つて来る。如何にもケーキのよう。その思いつきに目を見張る。

年長組。銀杏の落葉にマシクインクでいろいろ着色し、葉の使用法如何によつて独創力を發揮し、人形も花も蟻も多種多様、小鳥は羽を大きく広げて飛び交うている。どれを見ても趣きの変わったものはかり、子どもの創作力に敬する。

子どもの私語を聞くともなく聞いていると、ほほ笑ましい。砂場のそのの柿の色づきを見上げてA児「柿が黄色になつたから取つたらいいや。」B児「みんな取るなよ。甘くなると先生がみんなに食べさせてくれるからとるなよ。おいしいぞ。」と二年保育の年長組の子らが制止する。色づいておいしくなつた頃、皮をむいて食後に全員に与える事を毎年の行事としている。子ども達のよろこびの声。

持ち合せの広告の紙や包装紙にいつしか覚えたらしい文字の手紙。

おかあさんせんせいたいへんおいしいかあかみて。ありがとうございました。こんなこれでおしまい。 かずこより

字の書けない子ども達は私のところへ来てはありがとう、おいしかったです。と口々によろこぶ姿。嬉しいかな、与えるよろこび、受ける感謝、この情景はいつまでも続けたいと思つている。

当園では保護者の方も園児達も私のことをお母さん先生と呼んでいる。四人の家族ぐるみ、他に二人の先生とでやっている。

四十歩の歩みを振り返る時、私は幸に若い時から真実のみ教え(親鸞聖人の教)を聴聞する折を得て信仰の力に生かされたこと、なすことのないおわらは世に永き

よわいをたもつかいやならむ

の明治天皇御製が深く心に沁み、一生を貫く道への大きな力になつて為に励まされたこと、はありがたい心の幸です。しかしながら、我が足あととはおほつかなければ、私を支えて下さる大勢の方々力の強さに今日まで歩ませていただいた御恩は忘れることなく感謝しなおなお一層の励みとなる事を誓う。

(鳥取・美哉幼稚園長)



住、道具、交通、通信、娯楽、教育、学校、芸術などの欲求を満すために案出されてきたものである。子どもが集団生活のための行動様式を学習するためには、彼らの欲求を満すために同様の過程を経るのである。この過程は、現代の学校のカリキュラムの組織化の際に強調される。このようなカリキュラムでは、相互に関連のある学習や行動は、人の経験領域とよばれる。カリキュラム単元という語は、子どもがその欲求をみだすに当って通るべき経験領域のことである。たとえば、航空学という経験領域は、飛行する機械に関するすべてのことをふくんでいる。飛行機は現代生活においてすべての年齢の人の興味をもつことである。ナースリースクールの幼児は玩具の飛行機に興味をもつ。そしてそれで遊びながら、理解を深めてゆく。2歳の子どもの経験は、飛行機を遊び、それをもって走りまわり、音をまねることである。それだけでも、2歳の幼児は、航空学の領域の中の一連の経験をしているのだと言ってよいのである。6〜7歳になると、子どもは模型飛行機をつくり、その名前を覚える。また空港の模型をつ

くる。彼らは飛行機をとばし、旅客を扱い、こうして作ったり遊んだりしながら、航空学の経験領域を広く深く探索するのである。それぞれの子どもの程度に深く広く正確にするかは、子どものレイテンスによる。そこにおける子どもの学習や行動がカリキュラム単元を構成する。したがってカリキュラム単元の内容は、幼稚園によって異なる。

子どもの要求に合わせて機会を与えること 実際には、子どもは身体的に、知的に、社会的に、情緒的に用意のできたときに行動することができ、そこで指導のためには次の諸点を留意せねばならない。(1) 子どもは一つの経験から他の経験へと自然に進んでゆくこと (2) その進歩は連続的であること (3) 子どもは準備のできたときにのみ、学習し行動するものであること (4) 各発達段階で、子どもの要求する行動型をとるものであること。そして子どもの指導に成功するためには、教師は次の諸点を考慮せねばならない。その年齢の子どもの特性 それぞれの子どもの特性 子どもが次第に理解を深めてゆくような経験の領域

以上の諸点を考慮した後には、教師は次の段階に進むことができる。

1、考えられる経験領域のリストを作ってみて、その子どもたちの成長に最も適当なものを選ぶこと。

2、その経験領域を通して子どもを指導するために、十分な準備をすること

3、その経験領域のある側面に子どもをふれさせること。

a、子どもがそれに関して何かをしたいという気持を起させるように環境をととのえる——実物、絵、書物、道具、その他の材料を通して。

b、子どもにその環境を探索させるようにしむける。その間に、子どもたちの興味のあるかを観察し、それを指導に利用する方法を考える。

c、子どもたちの話し合いを指導し、次に何をしたいかを見る。

4、その経験の中で要求されている行動のしかたを自分のものとするように、それぞれの子どもの能力に合った指導をする。それぞれの子どもが成功を経験するように助け

る。経験が連続するように考える。すぐ前の経験から出発して、次の経験にうつるように。

5、経験が進行するにつれて、その経過を記録しておく。――それは新しい材料を発見する上に、また子どもが要求を満しているかどうか評価する上にきわめて重要である。

6、各経験のしめくりとして、子どもたちの活動の結果を、親や友だちにみてもらうように助けること。

#### 発達の特徴を知ること

5〜6歳児の特性

身体的 5〜6歳児は動きが大きく元気であり、その行動ははっきりした目標をもっている。たとえば、5歳児はつききをつむためにつむのではなく、船や飛行機をつくるためにつむ。

#### 社会・情緒

2、3人から8、9人の小さなグループで遊んだり仕事をしたりする。

協力もするし、他人を排斥する能力もすすむ。

例 トニー 僕にも釣らせて

他の子 だめ

トニー 僕も釣りたいな、やらせて。

他の子 だめ

トニー 先生がやってもいいって言ったよ。

他の子 だめ、あっちにいけ、他の人は立入禁止だよ。

トニー (動かない、突然よい考えが浮かぶ) 僕お魚になるよ、そうして釣ってもいいよ。

ここではトニーがよい考えを出して、問題を解決している。しかし多くの子どもはまだこのような場合、先生の助けが必要である。

彼らは次第に他人の権利を認めることを学ぶようになる。

#### 知的側面

目標がはっきりしてくる。例えば木片を子どもが見る。考えが浮かび、目標がきまる。彼は飛行機をつくり家にもってかえる。おいていくように言ってもきかない。計画はほとんどしない。問題解決は、試行錯誤によってその場でやる。自分でつくることに熱心で、自己批判はない。

5、6歳児の発達特性は、重要な教育的意義をもっている。教師はクラスの環境をととのえるのに、次のような点に考慮せねばならない。

1、この年令の子どもに適切な経験領域は家庭と地域社会の生活の中に見出される。

2、子どもたちが相互に交るような環境をつくり、それが経験の中心になってゆくこと。

3、一つの興味は長期間つづかない。しかし同じ興味が何度もくりかえされる。

4、一つの領域の経験は、多くの小さな場面を發展させることによってなしとげられる。

5、形式はならないおはなしは、子どもの直接経験を見い出させるのに役立つ。近所への小さな見学はすばらしい基礎をつくる。

6、静かに坐って、一しよにきき、ともに話す能力が発達するとともに、社会的技術を使う機会を与えることができる。

7、ごっこ遊びの環境をつくることはとくに重要である。船、自動車、飛行機などを作ることはこの年令の子どもにもっともふさわしい。

8、問題をなくすために、予め計画することとは、6歳児では一般にむたである。

9、大きくて、どのようでも使える材料が適当である。

10、作るのに必要な道具、たやすく使えて

安全な道具が与えられねばならぬ。

#### 6と7歳児の特性

5と6歳児について言われたことは、すべてここでも通用する。次の諸点は相異点である。

身体 より細かい筋肉活動が発達する。そこから書く能力やより小さなものを作る能力と興味が出てくる。

社会・情緒 より多くの人数のグループができる。ほとんど1クラス全員でごっこ遊びをすることが可能である。敵や味方にわかれて対抗することがあらわれる。

知的側面 興味がより長く続くようになる。たとえば5歳児はつきみや箱で飛行機をつくることは毎日やって8日から10日くらいである。6歳児は、クラスの半分くらいが参加して、6週間くらいにわたってそれをつづけることができる。7歳児になると、クラス全員が参加して、飛行機をつくり、郵便を運ぶ、汽車やボートをつくり、郵便局をつくる。そしてそれは他の社会生活にも発展して一年間でもつづけることができる。7歳になると、あるプロジェクトを始める前に、子ど

もたちと計画することができる。

右のような発達特性から、教師はクラスの問題を整えるのに次のような点を考慮することが必要である。

1、この年令に適切な経験の領域は、現在の地域社会の生活である。また、他の土地との比較をすることもできる。

2、模型をつくる能力が発達するから、環境に対する理解を深め、探索の機会をつくる。

3、仕事の期間が長くなり、友だち同志とお互いに批判する態度が生れる。

4、クラス全員の興味が一つの大きな経験領域に集まることが可能になる。

5、経験がひろまり、また、深まる。

6、話し合いの中で、予め計画することが可能になる。子どもたちの目標に照して評価することができるようになる。

7、経験の中に、読む材料をとりいれることができる。必要な注意がきなどをたのしんで見る。

8、経験を記録する能力が発達する。書くことを導入することができる。

9、経験が終末に近づくとき、ある子ども

は、過去に起ったこと、将来に起ることに興味をもつ。

10、考えたことや感じたことを芸術に表現する能力がよりよく発達する。

11、人や物に同一化するが、それはごっこ遊びでやっているのだということを意識するようになる。

12、ごっこ遊びが主体となるが、現実社会で起っていることをもつととりいれてゆることができる。

#### 8歳児の特性

以前の年令の特性に加えて、次の点はとくに強調される。

身体 この年令の子どもは頑丈であって、元気のよい遊びをする必要がある。

社会・情緒 所属するグループの範囲がひろがる。家庭の中の安定感はずでに確立し学校における友人関係の安定を求める。

知的側面 8歳児は好奇心に満ち、積極的である。事実を知りたがり、知識を求めて書物を見る。直接にふれる環境外のことにも興味をもつ。時間、空間的に離れたものに興味をもつ。大部分の子どもは考えたことを書

くことができ、必要なことを読むことができる。知識を系統的に整理することのできる時期である。

以上の点を考慮して、8歳児は次の点を留意することが必要である。

1、過去、現在にわたって、地域社会や他の土地の生活が適当な経験となる。

2、完成するのに長期間要する仕事が良い

3、手先が器用になるので、手先を使う仕事を中心になる経験領域が良い。たとえば、丸木舟をつくる。ねんどの壺をつくる。港の

模型をつくるなど。

4、共通の目標を意識し、同じグループに属する意識を強める。

5、より広い社会の一員としての自覚をもつようになる。

6、問題を解決することに満足を感じるようになる。

### 経験領域を選択すること

子どものために適切な経験領域の選択に当って、教師は重要な役割りを果たす。計画をするに当って、教師はカリキュラムのすべての面を心に留め、そのクラスの子どもの経験領域

の選択にいくつかの段階をへなければならぬ。その段階は次の通りである。

1、このグループの人的、身体的、知的能力の構成を分析すること。

2、計画した経験を有効にするために、利用することのできる地域社会の資源を発見すること。

3、可能な経験領域をいくつか研究すること。そして、子どもたちが一つの経験から他の経験へともっとも自然に移ってゆけるような領域を選ぶこと。

4、次のような間に自分で考えてみるとたぬになる。

a、その領域の経験をするのに、子どもはそれだけの成熟をしているか。

b、その経験はどのくらい子どもの興味を刺激するか。

c、その経験は子どもの好奇心を満すか。

d、その経験はごっこ遊びとなっているか。

e、その経験は材料をつかって作ったり、操作したりする機会となっているか。考えたことをお互いに話す機会となっているか。音楽や芸術やリズムの機会となっているか。

f、その経験は愛情や安定感や所属感の欲求を満しているか。

g、その経験は学校の内外の子どもの以前の経験と関係があるか。

h、その経験の連続的学習の機会となっているか。社会的態度をひろめるのに役立っているか。

i、それは、もっとひろい範囲の研究に発展することのできるものであるか。

j、その経験は、子どもたちのいろいろな個人差をうけとめられるほど、豊富な内容をもったものであるか。

k、それはグループの民主的生活を促進させるか。それは小グループの協力に導くものであるか。

l、それは、自覚性と共に、他人の権利や福祉を考慮するようなものであるか。

m、主要な人間活動はその中にふくまれるか。すなわち、生活と健康の促進と保護、財産や自然資源の保護、原料の生産、商品の生産と消費、交通と物の交換、通信、娯楽、芸術的客観的表現。

n、材料や教材は得られやすいか。十分な

時期があるかなど実際の考慮を払ってるか  
幼児に適切な経験領域

5歳から9歳の子どもにどのような経験領域が適切であろうか。子ども成長発達についての科学的な研究を、カリキュラム計画に  
ついでの実験的研究から、次のような経験領域をおすすめすることができる。

5〜6歳児

・家庭

・地域社会

交通に関すること——汽車、船、飛行機、バスなどはとくによい。

家、店、郵便局、マーケット、公園、消

防署などは適当であろう

・農場

7歳児

・地域社会

テハート——どのようにして品物が作られ売られるか、他の国の品物、昔の品物など

ハン屋

郵便局、消防署

・地域社会全般

地域社会にはどんなものがあるか——各

種の建物、駅、貨物、交通機関

8歳児

船——浮ぶ船をつくる。港の活動、輸出輸

入、いろいろの国、いろいろの時代の船、

汽車と交通機関

鉄道の活動、貨物トラック——トラック

をつくる、積荷のこと

ハイウェイと安全について

インディアンの生活——その生活様式

経験の連続性

経験領域は子どもの発達にそくして連続的に  
つくられねばならない。次にその一例をふ  
す。

第一年（6歳児）

・家庭

原紙で大きな家をつくる、このことから  
出発して近所の家に興味をもつてであろう。

家を建てる人、建築材料に興味をもつ

材料、れんが、石など。

家具をつくる

皿をつくる——陶器をやくところを見学

するとよい。

家族の人の役割をとったおうちごっこ

家庭を訪れる人に興味をもつ——やおや

電気屋、牛乳屋、植木屋、郵便配達など

牛乳屋の車をつくる。

やおやのトラックをつくる

・地域社会

やおやの模型をつくる

菜園をつくる

母親のために昼食をつくる

農場見学

トラックをつくる

やおやをめくって、町をつくる（この  
へんで最初につくった原紙の大きな家  
はとりこわす）

道路、駅、鉄道などをつくる。

人形を使ったこっこ遊びをする。

第二年（7歳児）

地域社会生活のつづき

銀行をつくり、お店やこっこに使う。

消防署をつくり、そこで何をしている  
かを調べる。

カソリンスタンドをつくる

公園、郵便局、劇場などをつくる。

飛行場をつくる



郵便を運ぶ船や飛行機に興味をもつ。

どのようにしてハンがつくられるか。

パンやさんをつくる。

製粉工場をつくる。

どこから穀物がくるか調べる―地図を

みる。パン製造の話を劇にする。

他の国ではどのようなパンをたべるか調べる。

昔の人はどんなパンを食べたか調べる

### 第三年目（8歳児）

船の研究

どんな船があるか調べる。

港までの地図をつくる。

港を見学する。

船の用語のリストをつくる。

各人異った形の船をつくる。

船を作るのに計画を立て、設計図をつくる。

船についての詩や物語をたのしむ。

船の歌をうたう。

船の建造について読む。

浮ぶものと浮ばないものを調べる。

何故船が浮ぶかについての知識。

港の模型をつくる。

港の規則 船員の任務などを学ぶ。

航路の地図をつくる。

輸出するもの、輸入するものなどのリストをつくる。

貝殻や海について興味をもつ

積荷を中心にして港の見学をする。

ゴム、綿などの品物に興味をもつ。

貨物船や荷物の上げ下しの機械をつくる。

ゴムについてもっと研究する

石油工業についてもっと研究する。

以上の紹介にみるように、この書物で

は、幼稚園と小学校一年生、二年生が一

しよに扱かれており、その間に密接な

連絡をつけようとしていることがうかが

われる。その連絡は、論理的な関連では

なくて、子どもの経験を関連づけようと

していることは注目すべきであろう。



（津守 真）

幼児の教育 第六十二巻 第八号

八月号 © 定価六〇円

昭和三十八年七月二十五日 印刷

昭和三十八年八月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
フレーベル館にお願いたします。

# 新刊保育図書

幼稚園教育指導書

## 健康編指導の実践

幼稚園教育指導書「健康編」の執筆者が実践指導のためにくわしく解説した書。幼児の健康管理、健康指導をより具体化し、参考となる資料をできるだけあげ、指導に役立つ手びき書。

中島 修他共著

定価 四五〇円

A 5判 三四八頁

〒一〇〇円

幼稚園教育指導書

## 自然編指導の実践

幼稚園教育指導書「自然編」の執筆者が実践指導のためにくわしく解説した書。指導書に示された指導目標、指導内容をより具体化し、保育の中で活用できる資料をあげ、指導書が活用できるようにした手びき書。

大島文義他共著

定価 三七〇円

A 5判 二九八頁

〒一〇〇円

フ レ ー ベ ル 館

# フレール館の新刊音楽書

保田 正 編著

教材とピアノ・レッスンのための

## 新しいマーチ

子どものリズム感を養うためには  
まずマーチから！

- 保田正先生の新しい編曲
- 学校の教材用またはバイエル併用ピアノ・レッスン用として好適の行進曲集
- 童謡から世界の名曲まで86曲が網羅されています

A 4判96頁

定価 400円

まど・みちお作詞  
磯部 俣 作曲

## ごはんをもぐもぐ

—おかあさんと幼児のための  
歌曲集—

- 幼い子どものためにとくに考えて作詞作曲された曲集
- まど先生のポエジーと磯部先生の新鮮なリズムとがびったり拍子をそろえた楽しい曲集
- 44曲、各曲解説指導つき

B 5判92頁

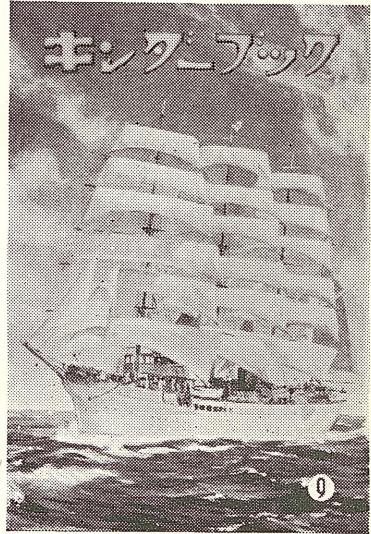
定価 300円



# キンダーブック

9月号予告

かぜ



帆にいっぱい風をうけて走る船、ぐるぐるまわる風ぐるまなど、子どもの興味をさそふ風。台風シーズンにおくる風とその利用を観察する9月号キンダーブック

A4判 16頁 付録つき  
60円

東京都千代田区神田小川町 3-1

フレール館

振替口座 東京 19640 番 電話 東京 (291) 7781~5

別冊

## キンダーブック

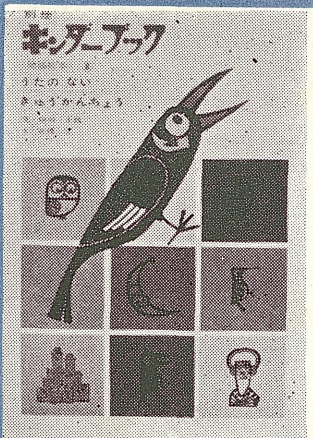
物語絵本

(季刊)

夏の号

うたのないきゅうかんちょう

文・藤田圭雄  
絵・大橋正



別丁ペアレソツコーナーつき

B5判 20頁 50円

別株式会社印刷